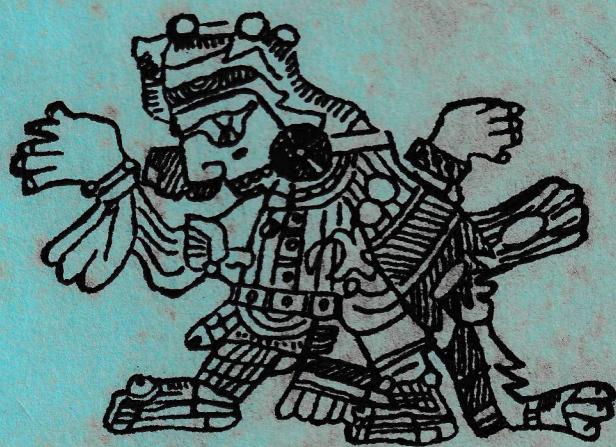


探検部報

1967年7月

オ2次 パラワン島調査隊一般報告

安家川調査隊一般報告



No.15

横浜市立大学探検部

巻頭言

月日のたつのは早いものである。幾多の先輩が夢みていた海外探検もフ
リピンにオー・オニカパラワン島調査隊を送り、台湾に蘭嶼調査隊等
を送ることによってまがりなりにも達成することができた。同時に国内では
無人島に、洞窟に、北海道の南拓村に探検部の強烈なエネルギーはほぼ
ほとんど全国にその足跡を印していつている。探検部はこれまで十年を迎
えようとしている探検部はこうした活動を通して大きな飛躍をうけてきた
か、反面、探検とは何か、その本質は、学生としての探検がどうあるべき
か、等々の本質的な問題に対する混乱が見られてきた。我々はこの中で再び
部設立の音にかえて根本的な問題を考えなおす時期にきているのではない
だろうか。こうした議論はもちろん机上の空論に終りては意味がないが、
実際の行動を通して何度もこの時点にまで来て全体を見渡し、それを反映
させていくことが必要であろう。部報オノ号を出すに当り、これらに対す
る自分なりの考え方を述べて今後の討論と一層の発展の発展としたい。
探検とは何かという問題に対しては皆がいろいろな言方をしていて、部
則によると未知の地域に対して科学的調査を行う事を目的とするというた
っている。コロンブスやマゼランの時代の地理学的探検は地球上では南極を
最後として一応終結したといわれている。地球上でと限定したのは、今や
米ソ二大国により、大気圏外へのアプローチが続々となされているからで
ある。明日の新聞で月に人間がおりた、たという記事を読んでも「ほう、
や、たか、少し早か、たな」という驚きを味わうだけだろう。そしておそ
ろくは、探検部員の中には「光をこされた」というくやしさをうぶり
感じる者もいるだろう。月への競争も軍事面、大口のメンツ、ナショナル
・インタレスト等に裏打ちされてはいるが、初めて月に到着する者の心には
未知のものへの熾烈な興味と人類の進歩に自分も幾分か参加しているの
だという強い使命感があるだろう。人間の持つ素朴なロマンチズム、未
知のものへのあこがれに人間への貢献という強い社会的使命感、そのため
には時にはあえて危険と見える事にも立向うという冒險精神が結びついた
ところに探検は生れるのではないだろうか、そうして学問というの本来
そこから始まるものだろう。我々は南の島で土人にまじって生活しながら
何を見たのか、何を感じたのか、北海道の南拓村で何を学んだのか。日本
国内では考え及ばないような文化的な相違、生活の違い、風俗習慣の違い、
そうした中で、例えばネグリティと言葉をわからぬまま心のどこかで通じ
るものが能動的に我々に伝きかけている。そうした中で自分の学問をつか
み、探検を通して具体的に発展させていく事ができれば本当にすばらしい
と思う。探検部は大学内の組織であるが探検は単に学生時代だけで終るも
のではないだろう。少くともその出発点だけはつかみたいと希望している
ところである。

合 田 寿

目

次

巻頭言	目次
I パラワン島調査隊一般報告	
序	
1. 隊組	織
2. 行動	日程
3. 地	図
4. 食料	計報
5. 食料	計報
6. 医療	報
7. 喪	告
8. 学術	報 (概略)

(合田 清)	1
	2
(合田 清)	3
	4
(鈴不 光)	4
	7
(井埜 邦明)	8
(安藤 嵩)	10
(鈴不 光)	12
(出羽 寛)	14
(隊員全員)	17

II. 安家川調査隊一般報告

序	
1. 隊組	織
2. 行動	日程
3. 地	図
4. 食料	計報
5. 食料	計報
6. 医療	報
7. 喪	告
8. 学術	報
A. 安家川	調査の概略
B. 水質	調査の概略

(名和 裕美)	22
	23
(新井 静男)	24
(藤山 正二郎)	26
(大橋 正敏)	26
(藤山 正二郎)	28
(大橋 正敏)	30

(小杯 虎二)	32
(峰岸 常之・大江 達彦)	33

III. 神島合宿について	
大学省と一採検部運動史の検討	
今後への活動への問題提起	
白瀬 中尉	
部 史	
41 ~ 42 年度活動報告	
部員名簿	
編 後記	

(遠藤 絃一郎)	34
	36
(峰岸 常之)	40
(大江 達彦)	47
(鈴不 宏尚)	50
(松橋 隆司)	51
	53
	54
	56
	62

I. パラワン島調査隊一般報告

序

—— 合田 涛

スリピン共和国の西部ルソン島とボルネオとの間に位置する南北450m幅は最大で50kmというパラワン島はスリピン第4の大島である。面積11790km²、人口約15万人であり南部に回教徒のモロ族、中部にタグバヌ族、パラワノス、中北部にバタク族、北部にピサヤ族が住み人種的にも文化的にも著しく多彩である。我々が調査対象としたバタク族はネグリートに属すると言われ、山中で原始狩猟採集及び焼畑を行っており、現存する東南アジア最古の民族とも言われる。彼らはパラワン島中東部、州都のプエルト・アリンセサから北東に60kmから90km離れた海岸からさらに山中に3km~10kmはいた所に住んでいる。1966年8月に約3週間、我々横浜市立大学第2次パラワン島調査隊5名はこのバタク族を中心として、民族調査を行い、同時に彼等の生活の場における生物調査を行った。我々はこの調査を通して彼等の生活や文化や社会組織等を明らかにし、資料として提供すると共に、彼等の将来の問題として急激に変化しつつある環境に対していかに効果的に適応してゆくかという問題を考察する事を目的とした。

スリピンでは約80種以上の異った言葉を話す文化的、宗教的、社会的に異った民族が3000もの島々に住んでおり、相互間のコミュニケーションも少く、バタク族に関して言えば、彼等の名前も正確な人数もつかぬおろず、もちろん何ら教育もなされてない。いかにしてこうした相違を克服し、国家としての統一性を保っていくかというのも大きな問題である。現在スリピン政府では国立博物館を中心として各民族の社会調査等を行なわれ、漸次進んでいるが、数も少く、最も原始的なバタク族に関してはこうした調査はなされてない。それに我々もまた言葉の違い、専門的調査訓練の不足、短い調査期間等から充分満足できる調査ができなかったことは残念だが、本調査がさらに色々な人々に発展的に継続されるなかで解決される事を期待したい。我々はこの調査がスリピン共和国の国家建設にいかんにかなりとも貢献し、平和で友好的なバタク族の人々の今後に役立つことを願ってやまないものである。微力な学生の集りである本調査隊が一応の成果を収めることができたのも実行に当り、字面面で多大な御支援を下さった都立大社会人類学教室の鈴木二郎先生、菊地靖先生、杉竹先生、東大文化人類学教室の馬淵東一先生、民俗学者の三好明十氏、資金面では横浜市、神奈川県知事、横浜港南ロータリークラブ、追交会を始めとする諸先輩、関係各会社、及び私倉学長を始めとする学内諸先生、その他枚挙に限りないほど多くの人々の御好意によるものであり、ここに心から御礼を申し上げます。

1. 隊組織 (学年は当時)

隊長 合田 寿 学術 商学部3年 民俗担当

川崎市中幸町3の26, 737

TEL (川崎) 51-8024

副隊長 鈴木 光 医療・庶務 文理学部3年 生物担当

横浜市金沢区六浦町1063 永志方

TEL (横浜) 70-9216

出羽 寛 装備 文理学部3年 生物担当

逗子市逗子7丁目12の20

井 埜 邦 明 渉外・会計 文理学部2年 民俗担当

横浜市保土ヶ谷区仏向町1324

安 藤 嵩 技術・食糧 商学部2年 民俗担当

東京都杉並区下高井戸2の552

2. 行動日程

— 鈴木 光

S.41. オニ次パラワン島調査準備会結成
隊員募集

S.41.4.11. オニ次パラワン島調査隊員決る。(合田・鈴木・出羽・井
埜) オニ次パラワン島調査隊結成

4.13. M.M.汽船予約, 計画書印刷へまわす.

4.15. 総会にてオニ次パラワン島調査隊正式承認さる.

4.18. 隊員に安藤が加わることを、部会で承認
計画書完成

4.19. 学長に *invitation letter* を依頼

4.22. オ一回シンポジウム

5. 6. Puertoprincesa Rotary Club への手紙発送

5. 7. オ二回シンポジウム

5.14. オ三回シンポジウム

5.15. 計画書改正版完成

5.27. 計画書、各関係団体へ発送

全員の *pass port* 申請終る.

5.30. 進交会関係の資金あつめ始まる.

6.10. 探査会員への援助願い発送

6.11. オ四回シンポジウム

invitation letter 発送 (Rotary, HTC)

6.18. オ五回シンポジウム

- 6. 23. 都立大菊地氏を訪問
- 6. 24. 破傷風予防注射 (オノ回) コレラ予防注射 (オノ回)
- 6. 25. 探査会・探検部懇談会 (於医学部ロビー)
調査について討論
- 6. 27. 都立大菊地氏訪問
- 6. 29. フィリピン大使館へVisa 申請に行くも書類不足で申請
できず。
- 6. 30. M.M.へ船賃の支払をする。
- 7. 1. フィリピン大使館へVisa 申請に行く。
- 7. 5. Visa がとれる。
- 7. 7. 教授会に計画書を提出。
- 7. 9. 東京渉外始まる。
- 7. 12. Holy Trinity College よりOK.の電報くる。
- 7. 15. 医療薬品そろう。
- 7. 16. 装備点検。
- 7. 18. オニ次パラワン島調査隊送会。
- 7. 19. パッキング, あいさつ状発送。
- 7. 21. 横浜港よりLaos 号で出発
- 7. 25. Hong Kong 着
- 7. 27. Hong Kong 発
- 7. 29. Manila 着
Shellborn Arms Hotel にあちつく。
- 7. 30. 飛行機の予約をする。
- 7. 31. 動物園見学
- 8. 1. F.E.U. 訪問
- 8. 2. U.S.T. 訪問 (マリアに会う)
- 8. 3. 鈴木、病気で Charity Hospital へ行く。
- 8. 4. 荷物発送
- 8. 5. Manila 発 - Puerto princesa 着
ロータリークラブ歓迎パーティー。
- 8. 6. 出羽・井荻, ジムと偵察に行く。他はElementary,
H.T.C. へ行く。
- 8. 7. Iwahig のプールへ水泳に行く。
- 8. 8. Elementary school へ行く。
- 8. 9. Puerto princesa 発 - San Rafael 着。Ben 紹介。
- 8. 10. San Rafael 発 - Tagnaya 着。
- 8. 12. Tagnaya 発 - San Rafael 着。
- 8. 13. 護往兵の交代
- 8. 14. 学校の実生が海水浴に来る。
村長宅の dinner に招待をうける。
- 8. 15. San Rafael 発 - Sumuroa 着
- 8. 17. Sumuroa 発 - San Rafael 着
- 8. 19. San Rafael 発 - Lipso 着
- 8. 22. 護往兵の交代
- 8. 23. Lipso 発 - San Rafael 着
- 8. 24. 合田・鈴木・安藤・井荻 San Rafael 発 - Tagnaya 着
出羽は San Rafael に残る。

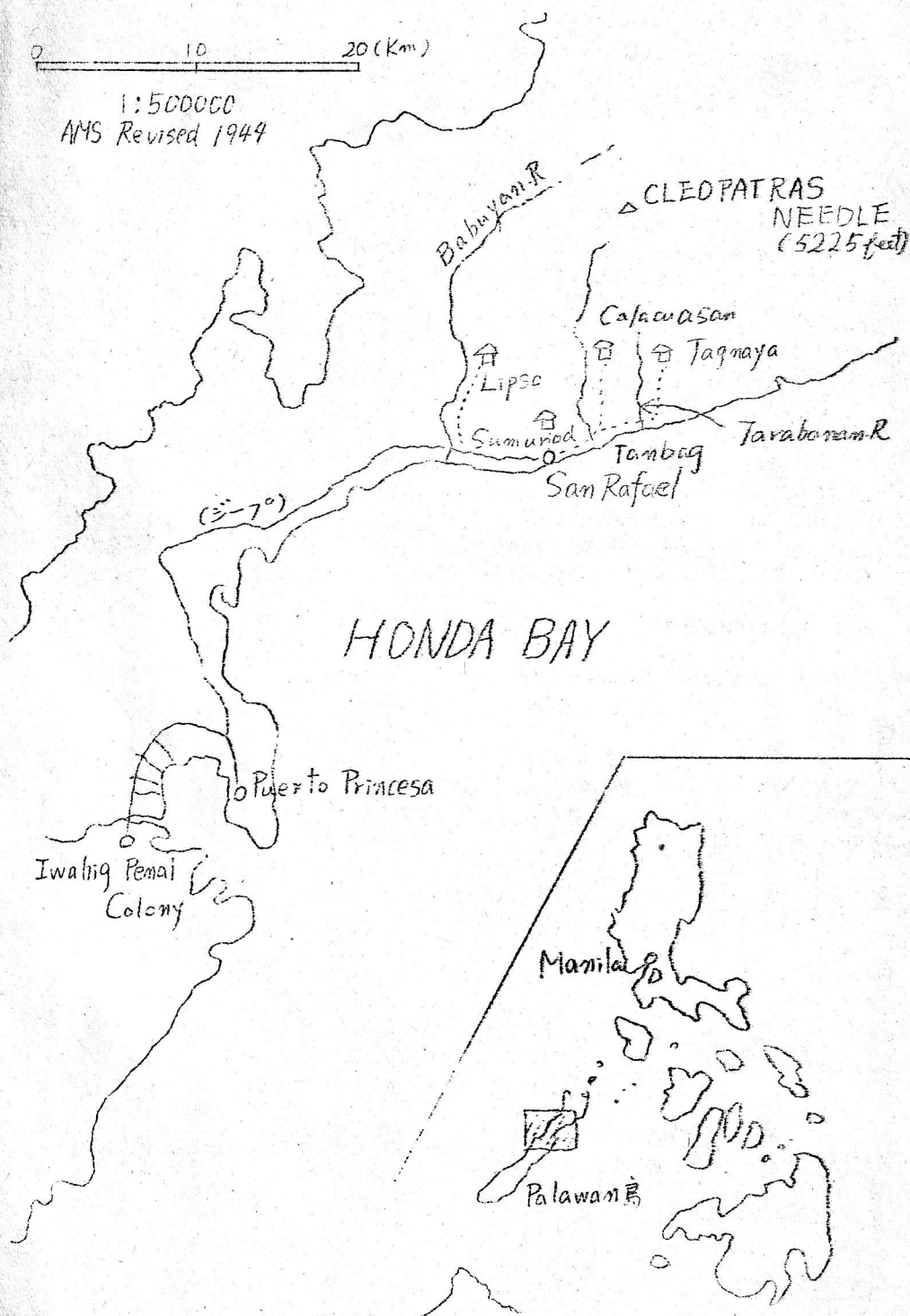
- 8.25 Jagaya 発 — San Rafael 着
合田・井埜が病気になる
- 8.27 出羽・鈴木・安藤 San Rafael → Calacwasan
合田・井埜は San Rafael に残る
- 8.28 Calacwasan → San Rafael 着
- 8.29 San Rafael → Puerto Princesa 着
- 8.30 移民局へ行く。
- 8.31 Elementary school・HTC 訪問
HTC で送別会を開いてくれる
Rotary Club の会合に出席。
- 9.1 Puerto Princesa - Manila
shellborn arms hotel にはいる
- 9.3 出羽 病気になる
Sioma College に行く
- 9.5 Manila 発
- 9.7 Hong Kong 着
- 9.8 Hong Kong 発
- 9.11 神戸港着 — 伊州 — 羽田
- 9.12 NHK スタジオ 102 出演
学長宅訪問
- 9.16 進学会訪問

42. 7月中旬 報告書発行予定

F.E.U Far East University
U.S.T University of Saint Thomas
H.T.C Holy Trinity College

0 10 20 (Km)

1:500000
AMS Revised 1944



オ2次パラワン島調査隊会計報告

井 埜 邦 明

収 入	
旧人負担金	315,000
れ次パラワン隊の残金	92,000
進 交 会	30,000
横 兵 市 市 長	50,000
横 兵 市 市 会 議 長	20,000
神 奈 川 県 知 事	10,000
神 奈 川 県 会 議 長	10,000
市 大 文 化 部 連 合 会	5,000
市 大 生 協	1,000
探 検 部 先 輩	21,100
進 進 交 会	22,000
市 大 諸 先 生	5,000
部	11,000
計	592,100円

帰 口 後 収 入	
朝 日 新 聞 掲 載 料	10,000
週 間 朝 日	15,000
朝 日 シ ー ナ ル	9,000
ア サ ヒ 芸 能	8,000
双 葉 社	35,100
旺 文 社	7,560
学 習 研 究 社	9,000
進 進 交 会	3,000
進 進 交 会 東 京 支 部	10,000
新 堀 会 豊 彦 氏 戻 し	2,000
税 金 松 山	6,677
学 校 計	35,000
計	150,337円

収入合計 742,437円

支 出	
国 内 航 費	241,920
疫 航 手 続 費	7,500
予 防 接 種	4,015
歩 外 費 及 び 雑 費	15,690
提 備 料 費	15,540
食 料 費	6,913
計	291,578円

国 外 港	
現 地 へ の 土 産 費	2,000
交 通 費 通 信 費 食 費	1,800
計	3,800円

マ ニ ラ (単位ペリ)	
食 費 通 信 費 交 通 費 其 他	688 00
宿 泊 費 (1/日 直)	66,900
機 往 復 運 賃	
(マニラ→PP)	48,400
air cargo	7,600
計	189,700

パラワン島内(単位ペリ)	
宿 泊 費 (含 食 費 7/日 直)	51,400
現 地 調 達 食 料 費	15,700
通 訊 雇 用 費 (22日 間)	10,000
民 間 物 議 費	1,000
通 信 費 飲 食 費 其 他	30,400
計	108,500

帰口後支出	
隊員の健康診せん	7,018
入院費(4人)	109,000
現地の方へのお礼	13,600
カメラ修理	6,800
写真現象処理増費	2,141
租 費	9,322
計	146,881

支出合計 719,585円

収入、支出差引き残高
 $742,437 - 719,585 = 22,852$
 残 金 22,852円

以上が第2次パラワン隊が発足してから現在までの会計報告であるが、摘要欄の内容に付いてはつきり分からない所があると思つので説明を加えたいと思つ。

まず、収入の欄から説明すると、第1次パラワン隊の残金とあるがこれは、40年の第1次パラワン隊が計画を遂行できないまま日本に帰つてきたため、ほとんど資金面では残つてしまった。そこで各方面からの寄付金を貯金してついで今回の資金の一部にしたのである。又、帰口後収入ではそれの中の雑誌出版会社からの収入は主として、写真の掲載料によるものである。税金よりの払い戻しとあるのは、雑誌社から送られてくる原稿料は1割の税金を差し引かれてゐるのだから、その1割の税金分である。しかしこの申告をするのが一部遅れてしまつて原稿料の全額の返還金ではない。最後の頃の学校よりとあるのは、隊員4名の者がマラリアにかかり、その治療費の一部としたものである。

支出の面では、マニラ、及びパラワン島内で単位ペリとあるのは、フィリピンの貨幣単位であり、1ペソは日本円にして約93円である。したがつてフィリピン内における支出の合計、2982ペリに93円をかけて日本円の支出とした。ちなみに、フィリピンでの総支出を日本円に換算すると、277326円となる。これと他の支出を合算したのが総支出となつてゐるのである。最後に、残金22852円あるが、これは報告書作成のために使う予定である。

食糧報告

— 安藤 嵩 —

今回の食糧計画では、案内人、護衛の兵隊の食糧のことまでをほとんど考えていかなかった。数量はもちろん、敵正計画も途中で大幅に変更しなくてはならなかった。その結果毎日同じような食糧ばかりで「食べる楽しみ」が得られなかったのは、完全に食糧係の失敗であった。

食糧の国内調達は、運輸時における損失、贈り物にもなる品物の多少多目の力がい、しかし今回のように飛行機使用の場合は、荷物の重量と疲労の爲、糖分と水分は多い方がいい。国内を除くと、食糧調達には、アエルトプリンセサで全部行なった、ここには市場があり、大抵のものは日本とほぼ同値段で輸入可能だったが、パン類は少なくて高価だったので使用しなかった。

個々の食品について長がついた点をあげてみる

- ・米……日本より少し安い、粘着性に乏しい、炊きあがると薄紫色になるものもある。味は悪く硬い。
- ・肉魚……ベースキャンプではニトリが、たまにきに入る程度、魚は3〜4日に一度
- ・野菜……あまり安くなく質もそれ程良くないし、アエルトスリンセサの市場では種類も豊富でなかったのは意外であった。
- 即席食品 } 一ヶ所に定住することが少なかった我々にとっては非常に
- 乾燥食品 } 有効だった、が中には案内人等の口に合わないものもかなりあったことは、注意しなくてはならない。
- 簡易食品 }

- ・調味料……日本製のものを多くに持っていった方がよかった。アエルトプリンセサでも中国製のショウユを売っていたが、味は良くなかった。手揉ショウユは贈り物としても利用価値が高い。
- ・嗜好品……緑茶は量が少なかった二倍は持っていった方がいい。コーヒーは、アエルトプリンセサでも入手可能であり、案内人、護衛兵が毎食事に飲んだので、予定の三倍ちかくの量に足りてしまった。菓子類は、日本とほぼ同値段であり味も良い。果実類は予想通り豊富で値段も安い。

次に七人（隊員五人、案内人、護衛兵）の三週間分の食糧リストをあげる

A. 区内調達			B. 現地調達		
分類	品 目	数 量	分類	品 目	数 量
主食品	ラーメン	20 個	野 菜	米	80Kg
	カンパン	10 袋		玉ネギ	50 個
即席食品	カレーの素	10 個		ジャガイモ	80 個
	ハヤシの素	6 個		ニンジン	20 個
	五目煮の素	3 個		パパイヤ	-----
	チャーハンの素	4 個		トマト	-----
乾燥食品			ど 他	バナナ	5 房
	ゆかめ	10 束		カモテ	-----
	乾ビウフ	10 個		缶 詰	40 個
	マカロニ	2 袋	嗜好品(調食用も含む)	魚 肉	5 尾
	お茶漬のり	50 袋		に じ ゃ ん	3 羽
	ふりかけ	50 袋		干 米	-----
	即席みそ汁	20 袋		タバコ	1,000 本
	即席豆腐	10 袋		カニタバコ	10 袋
	漬物	20 袋		中華酒	10 瓶
惣合食品	梅 干	5 袋		ヤシ酒	7 瓶
	佃 煮	10 袋		コーヒー	3 瓶
	味噌 漬	1 年		砂糖	2Kg
	年 漬	20 個		菓子類	5 袋
調味料	ショウユ	10 瓶			
	ソース	2 瓶			
	砂糖	500g			
	塩	500g			
	しょう	1 瓶			
	ゆさび	1 年			
	ケチャップ	2 瓶			
	ミ ソ	2Kg			
	油	2 年			
	化学調味料	3 年			
嗜好品	緑 茶	300g			
	紅 茶	1 年			
	コーヒー	1 瓶			
	粉末ジュース	5 袋			
	即席シルコ	2 袋			
	菓子類	10 袋			
	スキムミルク	1 年			
	永砂糖	4 袋			

パラワン医療報告

鈴木 光

熱帯、ということから先づマラリアの予防薬をそろえた。レゾヒンを用いたが、これは1人週2錠服用すればよく、現地で感染した場合を考慮して5人が2ヶ月間使用する量の他に、3人感染しても大丈夫なだけの量を用意した。次に、外傷の場合の化膿止め、消化器系統の薬、鎮痛解熱剤、坑生物質、防虫剤、浄水剤、栄養剤などを用意した。(これは別紙) 各薬品について報告してみると、レゾヒンは7月21日に5人一斉に服用し、最初は1人4錠、ついで一週間毎に2錠づつ服用する。途中、オ4回自服用の予定は8月11日であったが、当日はクレオパトラ、ニードル山登頂のため、疲労が激しく副作用の出るのをおそれ、服用を1日早め8月10日とし、以後、帰国後の9月14日まで規則正しく服用する。現地で通訳、護衛兵、現地人などのマラリア予防もしくは治療のため80錠程度使う。バタク族内でのマラリアの状況は、そのほとんどが罹病しており、その結果、腹が前にとび出している。熱は伴う様子はなく、別にこれといって自覚症状はない様に思えた。しかし、行く先々、どこでもこのマラリアの薬は湯

化膿止め薬としてクロマイ軟膏、ケナコルトA、ヨードテンキ、マーモロクロム液、オキシドールなどを用意する。使用頻度は多く、毒虫に咬まれたり、イバラで傷をつくった時には必ず使用した。同時に坑生物質を用いたため、自立つ鞋の化膿もなかった。現地人で、ツメを裂いて化膿している者、ヤケド、オデギ、切り傷、打撲傷などをもった者の治療もした。効き目は良く、ほとんどがクロマイか赤チンで殺菌を果した。ツメを裂いている者は指が化膿していたため、坑生物質(アイロタイシン)とヨードテンキの併用で治した。

消化器系統の薬として、消化剤、胃薬、整腸剤、を用意する。消化剤、胃薬等ほとんど使用せず、一番多く使ったのは整腸剤であった。慣れないこともあったが、精神的な疲労から胃腸障害をおこす事が多く、メキワホルム錠が役立った。アエルトアリンセサでは持参の薬が購入したものもある。(Poldemycin made in U.S.A.) 現地人への使用なし。

鎮痛解熱剤は、1種だけ服用すると副作用があるため、数種用意する。(利き目も又になる) 隊員で、腰痛、頭痛のために時折使用した。特に下痢を伴った腰痛の場合は、増量して使用した。特に、調査期間の最後の方での腰痛を伴った下痢患者が多く、痛みのため歩行不能になった時もあった。他、睡眠不能の者もあった。メキワホルムかグレラン、ソクラン等を治療する。現地人で頭痛を訴える者が多く、その場合はソクランを1錠与えた。

坑生物質として、アイロタイシン、タオシン、レガマイシン、ニューシリンを用意した。虫に咬まれたり、外傷の場合などに、化膿し始めると用いた。2〜3回しか用いなかった。現地人の治療にも1度用いた。

防虫剤は多くは蚊よけの意味でもっていった。リペラン、モスパーなどであるが、汗による流失などもあり効力を発揮しなかった。

浄水剤として、ハラム錠を用意した。飲料水は河川の水を1度煮沸したものを用いたが、生のままでも使用不可能の状態にしておいた。予想外に使用量が多く、1日に30錠以上使い、そのため全量150錠は数日で終ってしまい、他はオスバン液を用いた。現地では地中より湧き出る水は清潔な水として用いられていたが、一度煮沸して用いた。

栄養剤としてビタミ₁₂剤を用意した。最初、現地の生活に慣れるまでは

食生活もうまくいかず、ビタミン剤を補給していたが次第に使わなくなり、全部でアリナミン100錠位しか使わなかった。他は現地人に与えたりした。ゼンソクで悩む1人のバタク族がいて、その治療にもこれを用いたが、幸いこれが効いてしまった。

その他に、ハップ剤・カゼ薬・逆性石けん液などを用意したが使用することなく終わった。

全体的な総括として、先づ、持っていた薬の量が少なかった。どの程度必要なのか、事前調査を十分にする必要がある様に思えた。又、薬の種類も、少し多すぎる様に思えた。もうすこし整理しても良かったと思う。又、薬品使用の際、量・時期・など、使用法については十分すぎる程の事前調査の必要性を感じた。今回の場合、医療係が薬品管理や、配布をすべてしたか、これは良かったと思う。一歩まちがえば一個の生命が消えるかもしれない場合もあるだろうし、そういう重要な役割を、十分な管理なしにわたさうことは非常に危険である。今後、合宿等においても、医薬品の管理は最善にまかせるのではなく医療係が常時携帯してほしいと思う。最後になってしまいましたが、これら、たくさんの薬品は医学部におられるO.B.の寺島 光氏の御紹介で、三共製薬(株) 横浜出張所、武田薬品工業KKより御援助していただいたもので、又、実地指導は寺島氏より御指導いただいたもので、隊員一同、心から感謝しております。

抗生物質	クロマイ	13	チョーブ入り
	アイロタイシン	95 Tab	
	タイシン	30 "	
	レタマイシン	80 "	
	メリアン	12 "	
胃腸薬と 整腸剤	エコーリシン	100 "	ペニシリン
	タカフレックス	250 Tab	
	三共胃腸薬	80 Pac	
	メキサホルム	180 Tab	
	ビオフェルミン	40 "	
鎮痛剤と 解熱剤	ソクラン	60 Tab	レジタン 30 Tab セデス 5 Pac
	スパリン	10 Tab	
	ブレラン	10 "	
所虫剤	リペラン(液)	200 ml	モスパー 1
	" (4-77)	2	
外傷薬	アンモニア水	100 ml	チョーブ入・ヒフ炎 逆性石けん液 疥癬包帯
	ケナコルトA	10	
	銀ホルム	1	
	オスバン液	100 ml	
	エタノール	100 ml	
	ヨードキンキ	50 ml	
ハップ剤 カゼ薬	1ベタタン	1	
	ゼーロール	2 Pac	
	ルル	50 Tab	Xリアン 1 Pac
	アレルギン	80 Tab	
	ハラゾン	150 "	
	ウルソサン	4 Pac	
	グロンサン	100 Tab	
	アリタミン	200 Tab	
			船酔い・ヒフ炎 解毒 浄水剤 肝炎 "
			ビオタミン 100 Tab

装 備 報 告

出 羽 寛

I. 装 備 リ ス ト

(共同装備)	(数量)	(費用)	(備 考)
ハンモック	4		米軍の放出品 第1次の 時、購入。ビニールの屋 根、カヤ付。
テント(6人用)	1		装備用テント
ラジオス	2		個人より貸与
ハンゴウ	2		個人より貸与
コップフェル	1		
フライパン	1		
食 器	12		
包 丁	2		
シヤモジ	2		個人より貸与
オタマ	2		"
茶コシ器	2		"
魚焼網	1		"
布バケツ	2		第1次の時、購入
ポリタン	4		
シャベル	1		
メ タ (10人用)	5	450円	
タワシ	4		個人より援助
クレンザー	3	120円	
ビニールシート(1m×2m)	2		積水化学より援助
細 引	5	300円	
石 油	2		Puerto Principe で 購入
ローソク	10	500円	
懐中電灯	5		湯浅電池より援助
ヘッドランプ	5		"
電 池 (単1)	40		"
(単2)	20		"
替電球	10	100円	
大工道具一式	1		個人より貸与
(ハリガネ・クギ・ドライバー カナツチ・ノコギリ)			
目覚時計	1		個人より貸与
輪ゴム	1箱	200円	
マッチ			Puerto Principe で 購入
釣道具一式	5	500円	
セロテープ	10		積水化学より援助
ビニルテープ	5		"
布テープ	2		"
カン切	4		個人より貸与
マジックインク	10	500円	
ベンゼン	2ビン	300円	防虫剤
乾燥剤	2		

(学術装備)			
捕虫網	3		
〃 柄	2	550円	1本購入
リング	3		
三角管	3		
毒ソボ	1		
三角紙			
クダビン	20		
マヨビン	5		個人より援助
トラップ (小)	100		第1次の時 購入
(大)	2	1440円	
解剖用具一式	1		
ルーペ	2		個人より貸与
カスミ網	2		第1次の時 購入
果子のあきカン	6		蝶・木ズミの標本入れ
注射器	2		個人より貸与
ハネバカリ	2		
ノギス	1		個人より貸与
巻尺 (50m)	1		
(1.5m)	2		
紙テープ	20	200円	
日付印	1		個人より貸与
スタンプ台	1		
棒状温度計	3		
最高最低温度計	1	500円	
ホリ気	200	200円	
根掘	1		個人より貸与
カメラ	5		
フィルム (モ170)	80		朝日新聞・アサヒ芸能より
(カラー)	20	10000	ネガタイプ5本 援助
			(HUK・岩波先生より) 援助
テープレコーダー	1		日立より貸与
テープ	20		〃 援助
ホルマリン	1000cc		
エーテル	100cc		
酢酸	100cc		
アルコール	1000cc	500円	半分購入

の二点について報告をされた。(第1次パラワン島探検報告書)
その旨は、(1) 軽便にこした事はないが、何かと単位に必要なのは、
ぎりぎりまで使用目的をぼかしてやること、それを十分に使いこらすこと
(2) 輸送について、飛行機、船、車などで運べる所と人が運ばなければ
ならない所とを分けて考えねばならないということであった。

今回、荷作りは、ちようつがいてフタを付け補強したリンゴ箱3つと、
キスリング5つで総重量は300kgである。(第1次はリンゴ箱2つと
キスリング4つ) 装備リストは1次のものを少し変えただけで大して時間
はかからなかった。又、費用は大体1万5千円位でこの内、フィルム代が
1万円である。考えてみると、ほとんど金がかかっている。現地でモ装
備が不十分であったとは感じなかった。1次の時の装備が残っていたこと、
各位からの物品援助があったことなど、金のかからなかった原因の一
つである。物品援助も含むと全体で5万円位の費用となる。とにかく、共
同装備に関してはほとんどクラブにあるもので間に合った。

横濱でラオス号に乗り込むとすぐ、リンゴ箱は船室にあずかってもら
った。キスリングはベッドの下にあしこんであった。それらは、マニラ
でも、アエルトアリンシサでも装備は泊った部屋にもちこんだ。マニラで
も、一流のホテルであるシェルボーンホテルでは、我々の大きな荷物を見
て驚いたようであったが、別にとかめられはしなかった。マニラのホテル
でリンゴ箱一つの中身をツツクに移し、リンゴ箱一つをヘリ、帰りは食料
のリンゴ箱一つへったので、帰りはザックと、民具や標本の入ったリン
ゴ箱一つとなった。民具や標本が多い場合には、帰りの方が荷が多い場合
もありうるだろう。

マニラ港に上陸する時、荷物代として金をとられたが、これは払わな
くて良かったらしい。老からホテルまで小型トラックを頼み、ホテルが
決まるまで数時間、引き回したため、3000円とられた。マニラからの飛
行機では、荷物代として、倍以上にふっかけられ、隊長が堪へてあげ合
った末、頼り家だとウラタベタ氏に現われて、定額に引きもとした。パラ
ワン島についてからは、日本にいる時から連絡を取っていたおかげで、受
け入れ体制ができていた。町の人々は親切で特に、ホテルの主人はよく助
けてくれた。おかげでスムーズに装備もアエルトアリンシサより70km位
にあるサンラファエル(ベースキャンプ)までシープで運ぶことができた。
我々は一切の装備をここにおき、必要なものだけをもって4つの部落に入
った。

次に、現地生活の中で装備に関して見てみよう。我々は、初めハンモ
ックで生活する予定であった。(テントは荷物用)。ところかどの部落で
も小屋を一軒貸してくれたため、ハンモックは必要なくなった。(サンラ
ファエルでも同じ) それで小屋の中でテントをフロンがわりにしたりし
た。寝袋は暑すぎた。一番快適なのは、ハンモックをつつて中にシュラフ
をしいてやることである。バタックの高床式の小屋には蚊はあまりはいて
ないが、それでも一番困るのは蚊である。初めてサンラファエルにとま
った翌朝、ハンモックを使わなかったものは蚊にさされて顔がでこぼこで
あった。クツは一人が登山クツ、他はキマラバンであった。現地人はけだ
してジャングルの中を歩く。我々も少々の時はくつろぐのはくのが面倒に
なっていたように思う。だが、運動がつかう用を定るようにな
る。思えるのだが、登山、川渡りの時、るのてキマラバンが最適のようだ。
それから初めのめしは、たき火で作った。しかし、どんな木がよく燃え
るのかわからないし、途中で雨がふって時間がかかるし、石が手に入り

さえすれば、やはり便利である。他のことで注意すべきものは、水がすぐ手に入る所だった為、ポリタンはほとんど使わず、布バケツでくんできて消毒して使った。また、リプン部落のボロ小屋で、突然、雨がふってきた、小屋の中はひどい雨もりで寝ることもできない。ビニールシートで天井に張って雨をふせいだ事もあった。

全く使わなかったものは、魚焼網と木工道具位であとけ、使う回数の差はあつても、どこかで必要になった。つまり、この装備リストが大体、最低必要なものではないかと思う(共同装備)。学術装備は目的によってそのつと変わるだろう、共同装備もより長期に生活する場合や、高山に登る場合等は変ってくるかもしれない、しかし、今回の経験をもとにして、より便利で軽量のものに改良していけばよいと思う、そのことにこの報告が少しでも参考になれば幸いである。

—終—

学術報告 (概略)

I. 民族調査

—合田 清—

パラワン島はフィリピン共和国西部北緯10° 東経118°付近に位置し、長さ450 Kmの中は最も広い所で50 Km、東北から西南にのびている。

面積は1179 Km²、山地が多く8つの主要ピークがある。北から
Mt. Irian (2169 ft) Stripe Peak (4860) Cleopatra Needle (5223)
Mt. Stovely (3930) Victoria Peak (5499) Mt. Granting (5860)
Mt. Macdulingajan (6839) Escarpado Peak (3471)

資源は水銀、木材、マンガン、クロム等が豊富にあるが開発の歴史は浅い。

気候は東岸と西岸とはその雨量が異なり、西岸では1月～4月が乾期、5月～12月が雨期であるが、東岸は乾雨期の別は少く、気温は1年中高く26°C位である。

南部は18世紀までボルネオのサルタンの支配であった。モロ海賊の横行を抑えるためにスペインはタイタイに兵營を設けたがモロとの戦いは、それ以後も長く続いた。政府の奨励にもかかわらずルソンやビサヤの人々はモロを恐れ入植しようとしなかった。軍政下におかれていたパラワン島が州に編入されたのは1902年である。現在同島には南部に回教徒のモロ族がおり海洋民族としてスル諸島を中心に活躍している。中南部西側の山中にはパラワン族が少数いる。モロ系の混血である。吹き矢をよくする。北部にはビサヤ族がいる。ビサヤ諸島に住む海洋民族である。ギリスト族を信仰する内地一帯はタゲバナア族がいる。特に中央部に多い。原マレー族に属し、人口は昭和17年で2万人だった。中央北寄りの山地にバクク族がいる。ネグリトに属するといわれ、黒人少数民族である。今なお原始採集、狩猟及び焼畑生活を行っている。ドクク語、コヨノ語等を話す。州都はアエルトプリンセサで島の行政、商業、交通の中心である。

—19—

華僑の商店が多く、タガログ語が共通語となつてゐる人口3万で、連立、空堀、大学、高校、病院、気象観測所、ロータリークラブがあり、水道と電燈はごく一部にしかない。他の町は北部のドモート4400人、タイタイ54人南部のブルー・グースポイント24人である。

我々が一緒に住み、生活を共にしながら民族調査を行つたバタク族は現在する東南アジア最後の民族であるネグリート族と言われる。身長150cm前後であり、色は黒く、髪はちぢれて、頭は丸い。男はGストリングスという木の皮のふんどしみたいなものをつけ、女は腰布をまとうだけである。彼らは山中に竹で簡単に家を作り、雨期には焼畑、その他の時には竹製の弓やわなにより、いのちをとり、さる、へび、犬とかげ、アルマジロ等をとり、タロイモ、カモテの類を採集し、また海にでて貝を取つてきたり、川で魚をつつたりする全くの原始狩猟生活を営んでゐる。その社会的・文化的孤立は我々の想像をつかめほどである。しかし性質はいたって素朴で、純真であり、むしろ、懐病ともいへよう。そのため、いつか他民族との接触をさうしてゐる傾向があるようだ。

本調査において自分は、第一に彼らの人口・家族数・集落分布・人口移動の歴史等を調べ、概略をつかむと共に、彼らの家族組織・社会組織等を主に調べた。

詳細は別冊の学術報告書を参照されたい。

パラワン島の音楽 一安藤 嵩一

今回の調査ではパラワン島西部のネグリート族の音楽がどんなものなのか、またそれが彼ら独自のものなのか、ということと環境・生活と結びつけて観察調査することとを目標とし、調査の結果38曲の採録曲、3点の楽器と、それらに関する資料をえた。報告書にはパラワン島音楽の概観、それらの生活と密着した病気を治すための唄について、採録曲38曲（同種類のものを16曲を含めたため22種類）の採録状況、曲（唄）の意味等、簡単な説明と採録例、楽器について、音楽・踊りと宗教の関係をのせた。

なお、ネグリート族独自の音楽は今回の調査の結果では7曲だけしかえられず、ほとんどがタゲバヌア族その他がうのものであつた。

ネグリート族の家屋について 一井登 邦明一

彼らの家屋に対する態度は雨つゆをしのげればよいということである。家を建てる場合とか、家の位置については宗教的制約はない。彼らの家は高床式（約1m）であり、家を建てる時くぎなどの代りにラタンというトウカ1種を組立てる。屋根はバンガというヤシの葉でふいてある。焼畑耕作中の家では1軒に2〜3家族住んでゐる事が普通である。1家族について1つの炉があり、炉上にあつて、炊事、寝るときの暖房として使われている。1部落に10軒位の家があるが、焼畑耕作中（5月〜10月）は畑に近い所に家を建てて住むのが空き家となつてゐるのが多い。詳細は別冊報告書を参照して下さい。

II. 生物調査

“自然につりて見た事、聞いた事”

一出羽 寛一

私は、20日間、それモパラワン島のほんの一部分を歩いたのみですが、パラワン島の自然といったような概観的な事はできませんが、私達の生活したアエルトプリンシパ（以下PPs）から60〜70km北の海岸線と山へ入った所にあるバタク部落付近の自然について書いてみます。

パラワン島は気候的には雨期・乾期のはっきりした所とそうでない所に

分かります。私達の生活したのは後者の北の部分で、雨の多い8月でした。現地の人々は、rain-seasonとdry-seasonとはっきり分けて語っていましたから、乾期・雨期がはっきりしていないといっても、相当な違いはあるようです。

マニラを飛びたった飛行機がパラワン上空にさしかかると、1000m以上の高さは中腹以上はベッタリと厚い雲でおおわれ、「ああ雨期なのか」と思わせるようでした。しかし、パラワン島滞在約1ヶ月のうち、天候を記してある17日間についてみると、1日中、晴れていた日が2日間、晴れたり曇ったりの日が5日間（1日中曇りは1日間）、そして晴・曇・スコールの3つを組み合わせた日が10日間でした。つまり、5日間に3日位の割合でスコールが降った事になります。雨期といっても毎日雨が降ったり、また1日中雨ということではなく、一番典型的と思われる8月23日の日記を見ると、「朝は、いつも雨後のように、まだう雲が流れ、空気は湿り、草はツユにぬれてる。しかし、少しすると湿気はおいやられ、ギラギラする日光と青空の一日となる。午後4時頃からくもり初めスコールのそよる気配。サンラファエルにもどりベンの家から荷物はこび終った途端にものすごい雨。もう薄暗かったが暗さよりキ、雨の白いカーテンで前の山々がかりてしまった。約1時間後、食後のタバコの時には、窓の下の水たまりがうつり、虫が鳴いていた。」

この日の雨は、一番強かった時で、ポツリ〜、ザーといきなりきた。普通は小雨が少しづり段々強くなって小雨でやむ。気温は直射日光の下では40℃近くあったと思う。しかし、スコールがくると相当涼しくなる。最も気温が下ったのは、8月24日の夜タグナヤ部落にいった時で24℃まで下り、相当、寒さを感じた。

パラワン島は、山脈が海へ沈下し、その頂上付近が残ったような細長い島である。ほとんど平地がなく、熱帯降雨林におおわれているという事がいく前に本等から得ていた知識であった。実際、歩いた所ではPPS付近と海岸線と沢谷にわずかな平地があるだけで、人間の手を加えた所以外は全て森林であった。ただ、登る予定だったクレオパトラ、ニードル山の山頂付近は、かん木が草草原になっており、山中には種々のウツボカズラ、10cm位のサソリがいてと聞いた。これは登ったことのある米人から聞いたもので、1500m位の山では頂上まで森林におおわれているだろうと思っていた私達には例外であった。森林は、人の手の入っていない所では、20m〜30cm位の太木が梢付近に葉を茂らし、日光をさえぎっている。その下にもっと低い木があり、下草はほとんどなく、落葉がしかれている。薄暗く、静かだった。下草はないが、ラダン(とう)のツルグからみあっていたり、トゲのある本性ラダのようなものがあり、歩きづらい。燦爛の跡に出来た二次林や、森林の3割はバナナも混った陽樹林で下は木のすごいヤブで、下るくぐること、乗り越えることもできないような所である。海岸線から1〜3kmほど山に入ったバタヤ部落までは沢谷に、私達にはとっていわからぬような道が続いている。ほとんど川原を歩いたため、歩きやすいが、所々、マブの中のトンネルみたいな所もあっていった。案内人のBenは、水の多い時は、このあたりまで水がくるのだといっていて私達の頭の高さ位ある木を示した。

PPSからサンラファエルまでの海岸線はいろけていて、逆路のように水田や燦爛が続く水田はPPS付近のみ。所々ヤシ林があり、人家の手わりにはバブヤバパイヤが茂っている。途中、大きなバブヤン河を渡ったが両側に森林がうっそうとしており、さすがに熱帯の河という感じをうけた。ここは河口に近かったウマングローナ河川あたりのなつた、もっと河口までいけばあるのだろう。

森林の中に住む動物はどうであったかという点、Benは「この森にはイノシシやタヌキが住んでいる」"奥へ行くと10m位のMarangという大木へ行くとそこが、せむ臭いものを感じた。実際、マニラのマニラ大学の博物館にも10m位のニシキヘビの標本があるのだが、何かなのだらう。Marangはニシキヘビとは違うと言われたが、ニシキヘビとは別の大木へ行くかどうかはわからない。所が我々がつかまえた大木は川原でつかまえた10m位の細いヘビ。2匹の雌である。コブラまいるけすだが、現地人もほとんどヘビに会わないらしく、大きなヘビを新しい獲物と聞くと、たまに見る位らしい。

森の中にすわっていると、梢あたりから鳥の声をきく他は実に静かである。時々、ムカデ、コオロギがはっぴきまり、森林性のキノコがとんとんと。バタクの腹面ではリスがよく遊び、一獲するたびに、喉を鳴らす。中には見た動物は、リス、サル、タヌキ(40-60cm)、タヌキ、カメシオンの様に色の変り多き、バタクから買ったトビリス、サンラフエールを買ったサンゴウ等である。タヌキはバタクの小屋の近くまで来た。イノシシの頭骨を見せ、サンラフエールの羽を盗んで、鳥を捕りなさいといつてバラワンジャクの標本を持ってきてくれた。非常にのびのびと、たまに森の奥で見る位らしい。鳥と昆虫は多かった。リスは捕りにくく、ヤシロ鳥の一種とミミズクとコウモリがよくかかった。フニモ多いと聞いていたが、一度も見ることはなく、誰によるとバタヤン川の奥に少しいる位らしい。

毎日、ネズミのワナもかけながら、各部落からベースキャンプまで往復しながら思っていた事は、一日中のんびりと森林の中で生活してみたいという事だ。たゞ、そうすれば、もっといろいろ動物が来る現わしてくれただらう。しかしこの問題はまた大いに難しくなってきた。畜産の目的と、物めめの経験であり案内人をして行動する事の危険とやら。我々の行動は全て部落と其のすわりの腹面の野原の及ぶ所にかぎられていた。そういった意味からモクレオバトランドの登山が実現できなかった。西の森でなう。タヌキ以上に、種々の動物や動物の生活を大自然のいそぎの中、どうやってつかまえたかという事に興味があった事があるに思ふ。

栽培植物について

— 鈴木 光一 —

東南アジアに散在する諸民族のもつ文化は其の民族の歴史そのまゝあらわしている。生活様式・言語などからその民族の歴史とくくに住居経路一はわかるが更にその決定目的のとして、彼らのもつ食物がある。民族とこれら食物になる植物(栽培植物)とも呼ばれ、研究する学問を民族植物学というが、現在未だ資料不足であって、しつかりと体系化されておらず今回の調査でえられた資料からでは手とめるといふには難しい種々状態である。従つて、今回の資料は、バラワン島における栽培植物という段階にとどめ、各々に観察されたことを述べた。

バラワン島ネズミ採集記

— 出羽 寛 —

僕の目的は、バタフ族の部落に於て、家ネズミ又は、半家、半野性のネズミを見つけ出しその生態を見るということでした。その結果600ヶ所のワナをかけ、2種類、4頭のネズミを得る事が出来ました。そのネズミは(*Rattus rattus* 2頭、*Rattus luteiventris subsp.* 2頭)東南アジアに広く生息する種類であることがわかりました。まず、僕の頭に残っている、大きな尾のノミは、海岸線から山まで続いている大きな森林であり、その中に住みながらと現わさなかつた種々の動物である。そして、そこに住むネズミである。ネズミの生態は、以てして未知のままに僕の前に残っている。だがもしすると、島で得た魅力よ

-21-

II. 安家川調査隊一般報告

序

—— 名 和 裕 美

安家地域が探査の候補地に上ったのはすいぶん以前からであった。具体案として提出されたのは一昨年であった。北海道雄武南発部落調査隊長であつた山口氏が、41年度の夏期探査地として、雄武とこの安家を検討されたのである。この二候補地とも地形的に恵まれず、交通事情も極めて悪く、日本文化がともに遅れた地域であつた。41年度の探査は雄武地域に実施されたが、この時の山口氏の安家の予備調査が今日の私達の探査に大きな役割を果たしてくれたと云える。私達の資料調査は5月中旬頃より始めたが、中心であつたのは元部長菅田氏であつた。菅田氏は入部当初から民族研究に興味をもち、探検部民俗調査の礎を築いたと云える人であるが、就任の關係で現地調査に参加できなかったことはまことに残念なことであつた。

安家地域は文明日本にあって、未だ「日本のチベット」「陸の孤島」等と云われており、事実このことを取り上げた書物もかなりある。このチベットを西から東へ太平洋に注いでいる安家川がある。この川は普通の日本地図では時には省略される、長さ30km弱の小さな川であるが、沿川の住民にとつては大切な川であることは云うまでもない。

私達の探査の対象となつた事項であるが、一つは先に上げた民俗及び社会調査、一つは安家川の生物・化学的水質調査であつた。さらに私達はこの地域に鐘乳洞群が存在することを知っていたが、探検部ではこれまで鐘乳洞探検は行なわれておらず、これについては、行なつか否かしばらく検討したのであつたが、ケイビング *caving* の初歩的段階へでも足を踏み入れようとのことで、実行することに決めたのである。安家川ゴムボート下りも企画したのであるが、これは先発の下見で無理とわかり中止となつた。

最初の民族・社会調査であるが、これは37年から39年までの3ヶ年にわたつて立命館大学探検部によつて詳しい報告がなされ、私達の調査の必要はほぼ無用と等しいことがわかつた。この方面では小林君が林業に関する調査を行なつただけであつた。

水質調査は「きれいな川の水質調査」として全く興味のある調査であつた。安家川は魚類の宝庫であり、公害に犯されない自然の川であり、都市の汚染された川との比較検討を目的とした。水質調査は季節、天候、昼夜などにより大巾にデータが変わるが、私達は事情により一回の採水しか不可能であつた。このため、得られたデータは確定的なものではないのが残念であるが、一資料として提出したいと思つてゐる。

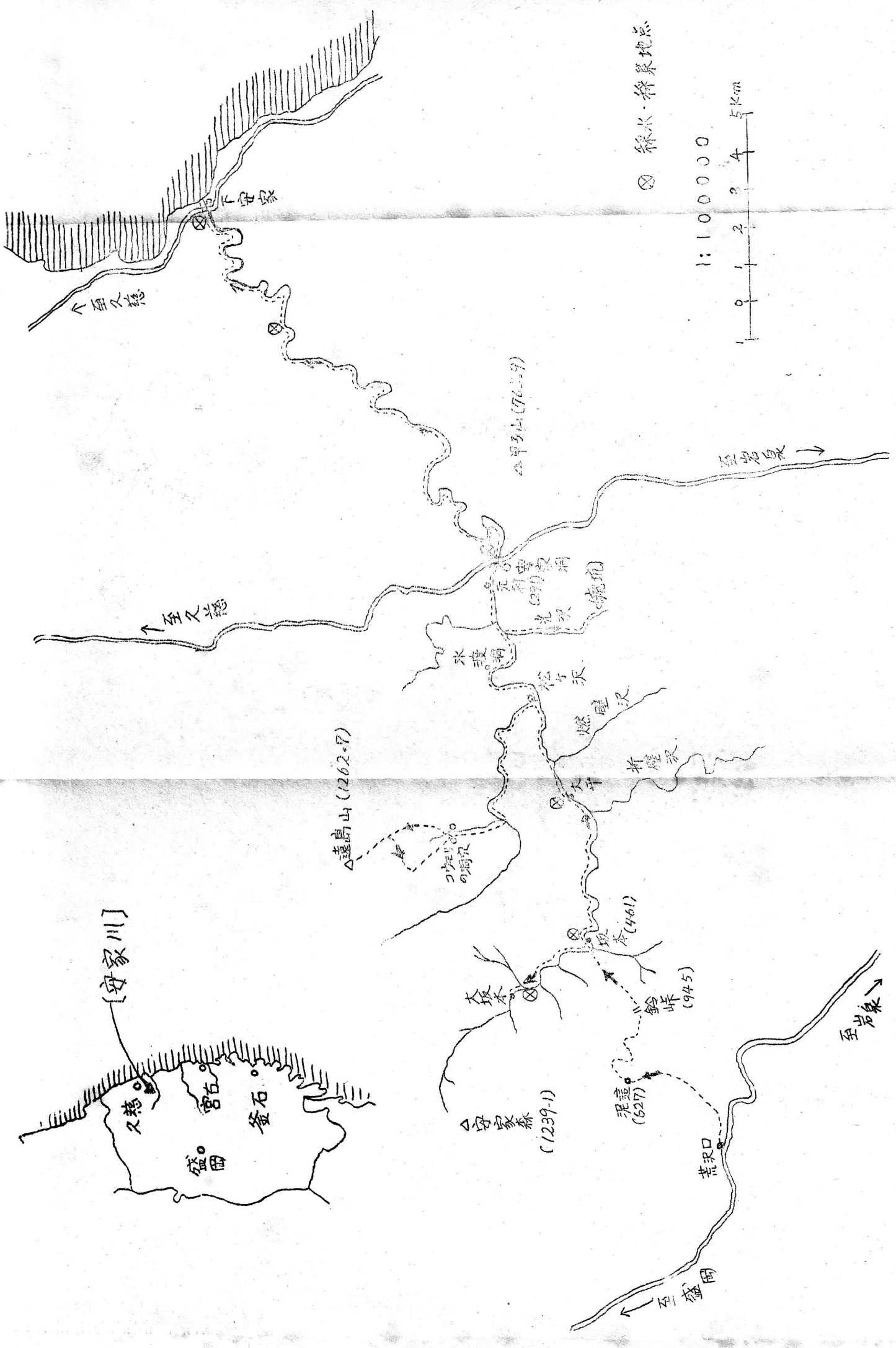
ケイビングに関してであるが、36年の京大・愛媛大合同による調査で安家洞が日本最長の鐘乳洞であることが確証され、以後この安家地域は未知の洞穴探検の場として御光をあび、以後、立命館大学、関西大学などがケイビングを行なつており、私達はケイビングにおいては大きく遅れていることを認めざるを得なかつた。詳しい事は報告書に述べることにして、ここでは私達の行なつたケイビングの概略及び感想を述べてみたいと思ふ。こまぜオーに装備であるが、これは横濱国立大学洞穴探検部を訪ずれば、だいたいそろえたつもりであつたが、最初の全蹶でもあり、実際に洞穴内に入りあつたらよかつた。こうしたらよかつたなどと思いつくものがあつた。次に洞穴に関する私達の前もつての知識であるが、これは全圖が初めてということで、ほぼゼロから出発しており非常に乏弱なものであつた。しかし、私達の行動は初めてにしては充分にその目的を果し得たと見える。

このことは以後のケイビングに十分な礎となると考えるからである。一口に云って、鍾乳洞探検ほど、身近に、肌で探検意欲を感じるものはないと思う。一歩奥はすべて unknown の地域であり、adventure, investigation の素養は充分である。

私達の 街は学術調査においても、Caving においても充分なものとは云えない。しかし、この探査で得たものをこれからの探検部の発展に役立つ様、私達は報告をしたいと思っている。

Ⅱ. 隊組織.

名和 裕美	化学3年	隊長	水質調査担当
大江 達彦	生物3年	副隊長	環状生物調査担当
小林 恵二	地理3年		地理調査担当
峰岸 常之	化学3年		水質調査担当
新井 静男	文科1年	庶務	
大橋 正敏	商学部1年	渉外・圧縮	
藤本 隆久	商学部1年	食料・写真	
藤山 正二郎	文科1年 (学年は当時のまま)	会計・装備	



2. 日程 (行動記録)

—— 新井 静男

8月2日 (火)

10:30 全員部室集合
13:00 解散
21:00 全員上野駅14番ホーム集合
23:01 小林着
23:05 急行「北上」で出発
菅田、高松、遠山、澤田
名和氏の妹の各氏見送る

8月3日 (水)

0:20 全員就寝
7:00 シ起床「井大橋」等
パッキングやり直し(新)
8:25 盛岡着
45 朝食(於駅地下食堂)
9:15 小林・大橋・藤山・野米買出し
名和・大江・峰岸・学術器具買
10:45 全員帰駅、駅前集合
11:50 盛岡発
12:55 沼宮内着(13:00発)
15:35 荒沢口着、野菜分担
16:00 シ発
30 小休止(40発)
17:25 露宮地着(泥這)
露宮、食事準備
19:45 夕食、(食当)峰岸・藤本
20:45 デザート(パイナップル)
21:30 就寝

8月4日 (木)

4:00 食当起床
5:30 全員シ
6:20 朝食
8:10 露宮地発(泥這)
40 小休止(50発)
9:10 小休止(25発)
(棕色の帽子の人に出会う)
40 小休止(55発)、水場
10:15 水場着
荷物半分にして鈴峠へ
(小林・藤山残留)
30 鈴峠着
45 名和・大江・新井 return
11:00 残留地着
20 シ発
35 全員鈴峠着
12:00 中食

(8月4日)

13:45 鈴峠発
14:10 小休止(20発)
35 小休止(45発)
15:10 小休止(20発)
40 小休止(50発)
16:05 坂本分校着
50 名和・大江・峰岸・新井・大橋
水場調査・ケイソウ採集
集に出発
小林・藤山・藤本残留、食当
18:50 水場集隊帰着
19:20 夕食
21:30 就寝

8月5日 (金)

4:45 食当起床
6:00 全員シ(気温15℃)
45 朝食
8:15 坂本分校出発
35 小休止(45発)
9:07 小休止(45発)
10:15 水場検査、ケイソウ採集
(気温24.5℃、水温16℃)
50 発
11:00 大休止
15 中食
14:18 出発
50 小休止(15:00発)
15:20 小休止(30発)
50 小休止(16:20発)
16:30 松ヶ沢分校着
露宮準備
19:00 夕食
22:00 就寝

8月6日 (土)

4:15 食当起床
5:00 全員シ
30 朝食
6:40 軽装で遠山へ出発
遠山着
洞穴入洞
昼食
多摩川始
頂上着
下山開始

<p>(8月6日)</p> <p>18:15 小林・藤山・藤本帰着</p> <p>50 大江名和着</p> <p>19:10 大橋・峰岸着</p> <p>30 夕食</p> <p>22:00 就寝</p>	<p>(8月9日)</p> <p>7:00 全員起床</p> <p>40 朝食</p> <p>9:30 名和・小林・新井・藤山・大橋・藤本・永渡洞へ、大江・峰岸・大坂本へ採集に</p> <p>50 永渡洞着</p> <p>10:00 ケービング開始</p> <p>11:30 プール着、ボートで奥を調査</p> <p>13:00 最深地発</p> <p>14:10 入口着</p> <p>15:40 安家中学校着</p> <p>20:45 夕食</p> <p>22:30 就寝</p>
<p>8月7日(日)</p> <p>4:50 食当起床</p> <p>6:00 全員シ</p> <p>30 朝食</p> <p>8:00 名和・藤山以外全員吐気、月夜ダケにあたる、元村の医師到着診察、大橋以外回復</p> <p>12:00 夕食</p> <p>19:00 就寝</p> <p>21:00 就寝</p>	<p>8月10日(水)</p> <p>5:30 食当起床</p> <p>6:45 全員シ</p> <p>7:25 朝食</p> <p>9:00 光沢へ出発</p> <p>14:10 安家中学校着</p> <p>15:10 昼食</p> <p>16:45 安家洞へ(小林・残・役場へ)</p> <p>17:00 入洞</p> <p>30 非公洞入口着</p> <p>21:45 安家洞最深部着</p> <p>22:15 発</p> <p>2:00 入口着</p> <p>35 夕食</p> <p>55 就寝</p>
<p>8月8日(月)</p> <p>4:30 食当起床</p> <p>5:30 全員シ</p> <p>7:15 永渡洞穴へ出発(大橋・残)</p> <p>30 シ着</p> <p>40 名和・新井・藤山組・大江・小林・藤本組に分け探検開始、峰岸・入口に残留</p> <p>11:00 名和組帰着</p> <p>45 大江組シ</p> <p>12:20 全員露营地(松ヶ沢小学校)着</p> <p>45 昼食</p> <p>13:10 出発準備開始</p> <p>14:25 松ヶ沢へ出発</p> <p>45 永渡洞着、小休止(55発)</p> <p>15:35 安家中学校着</p> <p>16:25 シ着、永渡洞へ</p> <p>17:00 永渡洞着(全員)</p> <p>20 全員ケービング</p> <p>19:50 最深地のプールに到着</p> <p>20:15 名和・大江・ゴムボートでプール探検</p> <p>30 シ着、出発地帰着、不明のゴートという音は滝と判明</p> <p>45 ゴムボートを残し全員引上げ開始</p> <p>21:30 大ホール着</p> <p>40 洞穴入口帰着</p> <p>22:20 安家中学校着</p> <p>23:45 夕食</p> <p>0:30 就寝</p>	<p>8月11日(木)</p> <p>6:00 食当起床</p> <p>7:00 全員シ</p> <p>8:00 朝食</p> <p>15 小林・大江帰る</p> <p>11:30 昼食</p> <p>13:00 安家中学校発</p> <p>15:35 新井・藤山・藤本・大橋・下安家着</p> <p>17:00 名和・峰岸着(安家川採水のため遅れる)</p> <p>19:00 夕食</p> <p>21:30 就寝</p>
<p>8月9日(火)</p> <p>6:20 食当起床</p>	<p>8月12日(金)</p> <p>7:00 起床</p> <p>8:30 朝食</p> <p>9:30 水泳</p> <p>12:45 下安家にて解散</p>

4. 会計報告

—— 藤山正二郎

〔団体収支〕〈収入〉	食料・装備費 (4000×8)	32,000
	予備費 (200×8)	1,600
	収入計	33,600
〈支出〉	食料費	13,000
	装備費	11,100
	写真費	2,000
	支出計	26,100
〈差引〉	収入	33,600
	支出	26,100
	差引残高	7,500 (円)

〔個人経費〕 団体経費 4,200. ※この外、個人装備・雑費などに
交通費 4,300. 一万円近くにはなった

※ 金を一部、ぼくの都合で他人にまかせたり、領収書をもらわなかったりしたため、収支がはきりしなかった。

5. 食料報告

—— 大橋正敏

まず献立から、今回は朝食はあ。さうしたものにしようと思ったので、種類は違うが、みそ汁、つけ物、フリカケ、それにカンヅメ1〜2つ、が通常であり、この範囲で3種類の献立をたてたのであるが、どうも毎日同じような感じの朝食になってしまって好評ではなかった。朝食は一日の活動の源であるから、もっと変化をもたせて食の進むようおかずに注意せねばならぬ。昼食は手軽なものをと、パン・ラーメン・焼そばなどを中心に献立をたてたのであるが、不満がなかったところを見ると好評だ、たのであろう。ただ、マーガリン、ジャムのようなもの、紅茶・コーヒーのようなものは、多くの種類をもっていった食事に变化を持たせる方がよかった。夕食に一番の注意を払、て献立をたてたつもりである。栄養価の高いものを存分にとり入れたつもり、それだけに食欲も夕食が一番進んだよう。

以上が朝食、昼食、夕食についての何々の報告であるが、全体的にいうと、2週間という長期間のために、肉類を摂取することができず、もっぱら野菜類が中心であった。肉類といえは、せいぜい、ソーセージ、ハム、缶詰ぐらいであり、いろいろ考えたすえ、絶頂、ハム、ソーセージを多

量を持っていったのであるが、皆しまいにばあきてしまってこれは失敗であった。また野菜類の方にしても、料理しやすく、アッサリしておいしく、食欲のない時など最適と思われるが、これ等はかりでは余り熱量にならないし、とにかく重く、非常にカサばったのには困った。これは現地で野菜が手に入るかどうか不明であったので、盛岡で2週間分を購入して全員で運んだのであるが、これから野菜を持つていく時には重量を考えなくてはいかんと結論した次第。それから、これ等の中には、いたみやすいものが多く、ちょっとぶつけると、そこがブチで腐ってしまい、すぐに料理せねばならなくなったものが多かったが、以後これ等の運搬に注意するとともに、いたみやすいものは持っていかない方がよい。

以上が今回の食料報告であるが、まとめると、ごくありふれたことになるのであるが、まず、食事に变化をもたせること、アッサリしたもの、カロリーの高いものをうまく組み合わせること、野菜類とともに肉類の摂取を注意すること、食料の保存に関してもっと注意を払うこと、など今後注意すべき事と思われる。

最後に、現地の食べられるか、食べられないかわからないものを、やたら食べることは、まかりまちがうと中毒する危険があるのでやめるべきであった。

食 料 リ ス ト

米 (朝 1合) 夜 1.5合)	11回×8人	22升	ジャム	4個
フランスパン (0.5個)	5回×8人	20個	マヨネーズ	2本
ラーメン (一袋)	4回×8人	32袋	コンソメスープ	12個
焼そば (一袋)	2回×8人	16袋	ミソ	3kg
ジャガイモ	4kg	37個	ハイミー	1袋
玉ネギ	4kg	20個	ショウ油	5合
ニンジン		2本	ソース	1瓶
キャベツ	5kg	6個	ゴシウ	1瓶
キューリ	1kg	8本	砂糖	2kg
ナス	2kg	15本		
ピーマン		20個		
タウアン		10袋		
フクジン漬		2袋		
わかめ		8袋		
漬物各種		18袋		
ぶりかけ		27袋		
しいたけ		2袋		
フ		4袋		
唐野ドウフ		12袋		
ハム		6個		
ソーセージ		30本		
カレー		30人分		

6. 安家隊装備報告

—— 藤 山 正 二 郎

I. 装備リスト

(持参個数) (使用度) (備 考)

(共同装備)			
炊事用具一式	8人分	大小	
ポリタン(2ℓ)	8	大	
石油用ポリタン(2ℓ)	2	大	
ポリバケツ	1	大	
ナタ	1	大	
カマ	1	大	
ラジオス	3	大	
メタ	大2	大	
石油	12ℓ	大	2ℓ現地購入
マッチ	大箱2	大	
トランシーバー	1組	小	日立より貸与
テント一式	4人用と5-6人用	大	
カメラ	2	大	部員より貸与
釣道具	1組	大	
水中メガネ	3	中	
薬品一式	1	中	援助品
テープ(セロファン ビニール・布)	1カンづつ	中	積水化学より援助
筆記用具	1	小	
(学術装備)			
ポリビン1ℓ	5	} 太	} 採水用
シ 100ml	6		
シ	30		} 浮游生物採集用 (化学部より貸与)
PH比色計	1		
プランクトンネット (直径 25cm)	1		
温度計(アルコール)	2		
ブラシ	1		
ホルマリン	1		
(派生装備)			
補助ザイル(30m)	1		
ヘルメット	5		
ヘッドランプ	5		
替電池	70		(援助品 (+20個 現地購入))
替電球	5		
ローソク	20		
マーキング用紙テープ	10		
フラッシュランプ	40		
フィルム カラー	2本		
フィルム 白 黒	10本		
巻尺(50m)	1		
測図用方眼紙	1冊		
磁石	2		

測定用細引 (10m)	5	大
ゴムボート (2人乗り)	1	大
筆記用具	1	大

正. 反省

今回の探検で装備として特微のあることは洞窟に関する装備が少なかったことである。仮に洞窟としても洞窟を手がけるには準備がわかっていて、いろいろな装備の点でもとまどうことがあった。しかし、今回の探検に突っ込んだため、比較的軽便な装備で済んだ。これらいろいろに備えていこうとすれば、バック・ブライミングの板垣に代えて洞窟の探検準備も必要としてとりかからなければならなかったろう。次の4回々の準備に努めよう。

(一般装備)

ラジオ ———— 3つあって、1つは2つのパッケン・グッスに代わった。しかしまさか洞窟での交信はなかった。掃除機は必要だが3台位は、ていくべし。

トランシーバー ———— 洞窟のように山地で洞窟内をほとんど浸透したくない。お前にその状態について熟知しておくことが必要。

ゴムボート ———— 洞窟内での移動途中で壊れたらしく、水に浮かべると沈んでしまった。一応、修理用具はもっていったが効果はなかった。

水中メガネ ———— 3つのうち2つがラスがわけていた、わけていたものへの注意が足りない。

電池 ———— 洞窟へよく入ったため消費度が大さかった。

(洞窟装備)

ザイル30m ———— 今回も探検だ。たためザイルの必要は余りなかった。洞内の池をゴムボートで渡った時に使っただけ。

ヘルメット ———— これは絶対必要。落盤の危険は全くないが、頭を天井にぶつけてケガをすることがある。

ヘッドランプ ———— 洞内で岩にぶついたり、電池ケースを落としたりしてしばしば故障する。貴重品として注意深く扱うべし。

ローソク ———— 洞内は風がないのが普通だから役に立つ。機動性に欠けるがヘッドランプの電池節約のため、ヘッドランプのように一瞬を照らすのとは違い、全体を照らすために便利。

マーキング用紙 ———— 複雑にいくついでない所では必要ないが、もし使用する場合は、出洞する時とりさっていくこと。

磁石 ———— 安物では狂いやすい。時々点検すること。

<洞内撮影について>

遠距離(2m以上)で撮影する場合、シャッターを開いたままフラッシュを数発(場所を変えて)たくとよくうつる。

近距離の場合でも強力なフラッシュを使用した方がよい。

7. 氷渡洞窟を探検して

—— 大橋正敏 ——

※ 岩手県安家川流域の松ヶ沢と元村の中間にあり、主洞の長さは約2kmで規模は中くらい、まだ新しく、地下水が盛んに流れている。

林道に面した洞口に立つと、ヒンヤリとして、あたり一面霧がたちこめていた。ヘルメット・チャップライト・懐中電燈・手袋・ローソク等の装備を点検しなおして、いよいよ中へ入る。始めの内は大人が十分たって歩けるくらいの所が70m~80mほど続いていた。突然、道がなくなり、左上に人の胸がやゝと入るくらいの穴があった。最初の難所である。上半身は案に入、たが、腰につけた電池ケースがひ、かか、て下半身がどうしてもその穴から抜けな。無理に通そうと腰を動かしているうちにケースを岩にぶつけ、チャップライトが消えてしまった。一方では足の下の足場がわからず、むやみに足をすべらす。こんなことをしながらやゝとその穴を抜ける。すると目の前に約70~80m、高さ約20mの大殿堂みたいな所があらわれた。この洞窟では一番広い所であった。ちやうど腹がすいたので食事をすることにした。アンパン一俵がヒフテキのように思えた。食後、荷物の一部をそこに残して、いよいよ奥へ入る。この殿堂の入口と同じような穴が下に続いていた。これがまた一番苦労だった。下りのため頭から入るわけにはいかない。足からである。足にライトはないし、目もない。足さぐりでおる他はない。くるぶし、ひざなどをあちこちの岩にぶつけながらおる。しかし、どうもうまくいかない。最後にはおるこうとも、上がることもできなくな、てしま、た。やたら体を動かす。そのうち、またライトが消えてしま、た。血そうと思ふのだが、手足がうまく動かさず、もどかしいはかりだ。仕方なく、後方からライトで照らしてもらって活動開始……やゝ、とのことで穴をぬけることができた。

下の道に出ると、そこからは中腰で進める高さですゝと続いている。そして、始めて鐘乳石があちこちにあらわれてきた。地下水によって溶かされ、ちやうどトンネルのようになった穴。地震が何かでくずれた大きな岩を越え、あるいはくぐって200mぐらい進むと、突然、目の前に直径約50cm、高さ3~4mの真白な石柱がさん然と輝いていた。いままでの鐘乳石が真弱だ。たせいもあるが、それはそこらにあるものとは違い見事な石柱で、ギリシャ神殿の柱をまのあたりに見ているようである。しかし、私たちは見物にきたのではない、探検にきたのである。奥へ進まなければならぬ。

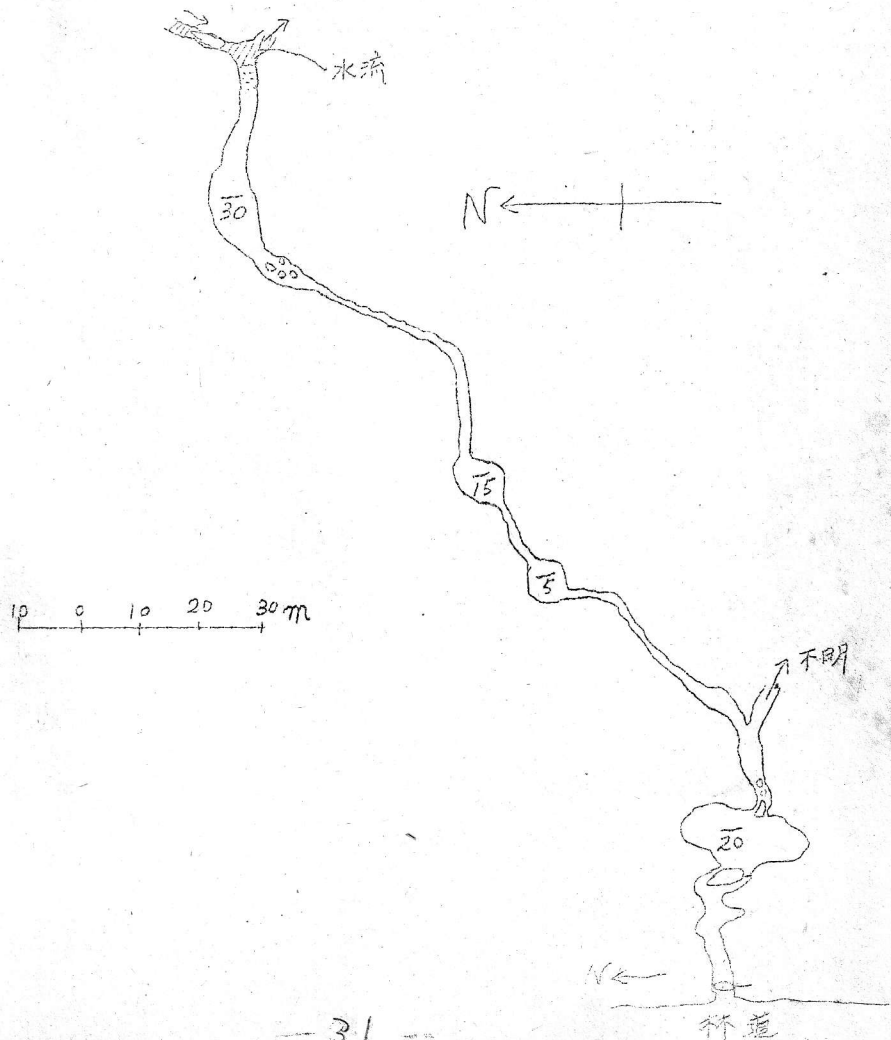
中腰の状態で、または這いながら200m程進むと、ゴォーという音が大きくひびいてきた。何だろう？すこし不安であった。俺ではないのかとそんなことを考えながらしばらく進むと、道は水にもぐっていた。そこから水が奥へず、と続いていた。そこで、も、てきたゴムボートをひろげる。交代で、ま、しろな息をはきながらボートをふくらます。しまいに頭がいたくなりフワフワしてきた。それでもやゝとのことでボートを作り、綱をつけて奥へ進む。

5~6m進むと流れは左右に分かれていた。どうやら水は左から流れ、水たまりとな、て右へ流れているようであった。右はすぐ小さな穴に流れこんで、それ以上進めなかったのて上流である左に向かった。5~6m進むと、高さ約3mの岩があ、た。外でみれば何でもないものに思えるのだ。

が、ここで見ると何となくすざい。音のせいだけではないだろう。そこをゴムボートをついで一気にのぼる。さらに奥へ進もうとボートを浮べたが、その先は穴が小さくな。て、人間には無理と思われた。それでも少しでも奥へと、ボートが通れなくなるまで進む。しかしついに行きどまりになった。これ以上無理だ。そこで記念のフラッシュをたいて、そこを退こうとした時、足下に自分たちのとは違うフラッシュの球が落ちているのに気がついた。ここには誰かがもう来ていたのか、自分たちが最初ではなかったのか。そう思うとガックリきた。

しかし、今考えてみると、私はここで、少くとも探検の一面である冒険というものを、初めて味わった気がするのである。

水渡洞略図



8. 学術報告

A. 安家の「焼子」の実態

—— 小林 豊 二

存在条件と概況

北上山地内部は冷害の襲もはなはだしい地域である。北東方向の山背風を受^{北東}ける。地形的にも山背の平地は少なく水田はほとんどなく大部分は山地とされて^{北東}いる。しかし、山地の平地は戦前に比べ、気候が冷涼なため、稲作にはほとんど障害を与えない。しかし、このような自然環境は農民の稲作の機械化を強力に迫り、一部の農民は山林、採草地、耕地を所有し、自給は^{北東}その小作人として、生活のほとんどすべての面で富農の支配を受けるに到る。この地域一帯が東北地方で最も強力な地主（地主）が支配し、かつ現在までその封建的村制が残存しているところである。戦後の土地解放は山林、採草地、家畜に關して何ら改革の寸を加えなかった。この地区で現在行われている「反炭」もこの地主制度を強く残している。戦時時代の著人から成立した数人の山林組合（加納、たんな）はその私有林を、数人の「ききこ」＝木こり、「やきこ」＝炭焼き労働者を積極的に結びつけ、企業製炭、原木販売（農林期に副業として製炭する農家に対して）に利用している。「焼子」は以前は、栗細農家の2、3男がその中心であつた。だが、又は家族で年中山中生活をしてきた者が多かつた。近年、林業資本が外から湧出して来たため、それへの労働者化したものが多い。「焼子」も村に残留している未制婦人労働力によるものが多くなった。「焼子」も徐々にその性格を変え、兼業が増え、人数も毎年20%位の割合で減少し、現在、男子195人、女子210人、計405人となっている。生産額は、S35年25.9万俵、S40年20万俵と減少しつつある。労賃は男子800円、女子500円（1日）

（ききとり、――木材検査所安家事務所長）

「焼子」の生活

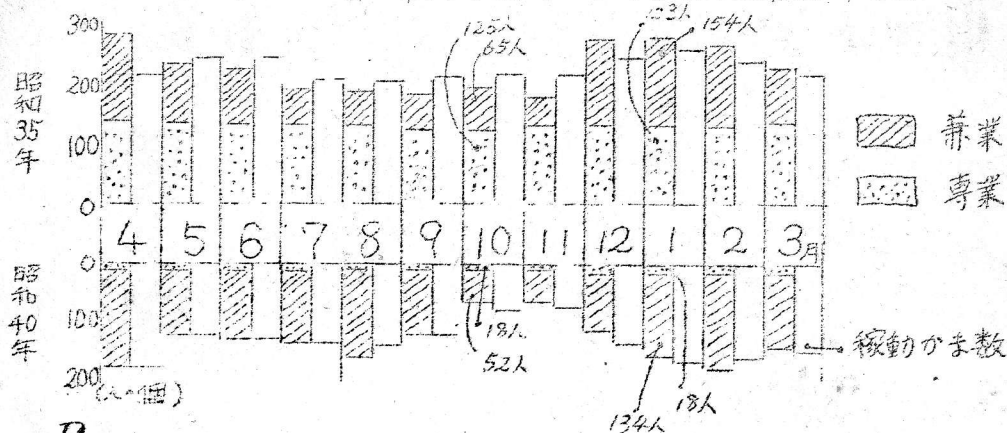
▼「だんな」小根口氏（検査所顧問）からのききとり

焼子は2人、1つのかまの一回製炭につき、四～五昼夜焼く。二人で原木・炭の出し入れを一日がかりでやる。50俵やく、（1俵15kg 400円）2.5万の製炭。かまは原木採集地の近くに作り、その大小は原木の量により決まる。かまは男子の場合、殆んど1人1機の割合で、女子は手伝いである。

▼「焼子」林下さん（婦人）からのききとり

6人家族で、夫は夏季、山林の造林労働に就業、冬は炭を焼く。専業で田畑はない。4時起きで、労働時間は朝8時から夕方6時30分まで、それ以上になる時がしばしばである。休暇は盆、正月位で、日曜日（日曜）は関係ない。雨が降れば、袋詰め、炭切り仕事。山元（山中）で働いている人（村から3km山中）は、全て人力にたよる。彼女は一人で2つのかまを管理している。テレビ、新聞はない。

炭焼(製炭)業に関する動向 < 安家村木炭検査所調査 >



B. 水質調査の概略

化学関係

—— 峰 岸 常 之

過去の学術調査隊のやり残してきた安家川流域水質化学分析に当り、採水地は安家川内6地、安家洞内2地である。(別図)

現地測定は、気温、水温、pH、透明度、において、の各物理的性質項目について行なった。採水はポリビン(1ℓ)に封入し、帰京後本学実験室にて室内分析にかけた。室内分析項は次の六項目についてである。

- (1). All-Alkali degree.
- (2). Magnesium ion
- (3). Calcium ion
- (4). Chlorine ion
- (5). Chemical-Oxygen-Demand
- (6). Arkyll-Benzene-Sodimate

結果は現在検討中であり、後に、他の調査結果と共に学術報告する予定である。

なお今回の水質分析にあたり、横浜国立大教育学部教授武藤寛、本学分析化学教室高橋久子、化学研究部伊藤明、各氏の御助力を承った。

生物関係

—— 大 江 彦 彦

安家川の水質汚濁度を生物学的に判定し、前述の水質化学分析の結果と比較する。

今回の調査では、渡辺仁治氏の「北海道常呂川の水質汚濁に対する珪藻の種類数に基づく生物指標」(日本生態学会誌12, 1962/216~222)を参考にして、採集物の個体数を考へに入れず、或特定の生物群の種類数の比、又は和を水質判定の指標とした。しかしこの場合特定の生物群に生態学的意義があったとしても種類数の比又は和に値する絶対的な意義は認めにくく、又、現在の段階では危険がある。でもこれが化学的分析の結果と何らかの関連性をもつ普遍性を有するものであるならば水質汚濁の生物学的判定として取りあうべきである。 — 33 —

III 神津島合宿について 遠藤 紘一郎

私達は伊豆七島の一つである神津島において、昨年8月25日より一週間の合宿を行った。本合宿は、その目的・内容において探検部最初の試みであった。つまり、今年三月の台湾嶼調査を目指して昨年5月以来その準備を進めてきたことは、同紙に記載されているのでおわかりと思いますが、その一環としての強化合宿という目的だったのです。

このように、本合宿の目的は、主に嶼調査に備える体力面、技術面の強化であり、並びに隊員の結束を強化することであった。一方、探検部員としての根本的な態度、即ち自然への探求心・観察心に基く調査活動に対する基礎的素養を身につけたいという目的もあった。それ故、次に列記するような目的を実行したわけであるが、それぞれに單に反省してみよう。

(I) 嶼調査に対して次のことを考え話し合う。

1. 本調査の意義 — パラワン嶼調査に続く海外探査としての意義と、隊員の情熱は充分高まったと思うが、調査に關する意義に關しては、過去の調査状態がわからないのを不完全であった。
2. 嶼嶼に關する知識を深くする。 — 文献資料その他の不足でほとんど進展しなかった。
3. 各自の研究テーマを嶼嶼を中心に展開する。 — 各自の興味ある分野からのアプローチとして、テーマを設定したに留まった。
4. 調査方法について — 上記の如くであるから、その調査方法も確立しなかった。

(II) 体力的技術的訓練を行う。

1. 天上山登山 — 体力訓練と同時に、火山島の様子を把握できた。
2. 島内半周 — 実際の島の状態と地図上での状態との関連を理解するに役立った。
3. ガイル訓練 — ほんの少し行っただけだが、ガイルに馴れたことは良かった。
4. ゴムボート訓練 — 全員がボートをこげるようになった。
5. 採集 — 時間の関係で不十分であった。
6. スケッチの書き方 — 3、4枚にすぎなかったわけだが、スケッチの重要性を感じた。
7. 野帳をつける習慣を身につける。 — 徹底されなかったことは残念である。
8. 料理技術 — 全員申し分なかった。

(III) 基礎的な探検精神を身につける。

1. 調査活動にとって必要な規則正しい生活をする。 — 理想的といつてよいほどこの目的は達成された。
2. 団体生活に慣れる。 — 楽しいふんりきの中で、結束力がおおいに強まった。
3. 自然への探求心と観察心を身につける。 — 結果としては判断できかねるが、かなり注意した。

(IV) 学習会・講習会を行う。

1. 天気図のとり方 — 毎日実行し、ある程度まで成果があがった。
2. 中国語の学習 — 主に日常会話を学び、中国語になれることができた。

3. 「探検部における自分」・「探検と蘭嶼調査をテーマに討論。
 — 各頃問題になっている悩みについて、お互いが理解できた。
 4. 探検観について討論。 — 主ト三年生を中心に話し合ったが、求
 論は出なかった。

以上のように総合してみると、一週間の短い期間の中で、蘭嶼本調査に
 対する直接的な効果はあまり上らなかったが、間接的な効果、即ち探検部
 員としてのオールラウンドな基礎的な素養は相当ついたように思える。
 蘭嶼調査に対する直接的な効果、即ちこの目的の達成は、12月の伊勢原合
 宿において完了したものと言えよう。伊勢原合宿はこの事を目
 的として行われたから。

それでは今回の合宿を行って、私なりに感じたことを述べた。合宿で
 前述したように、この合宿の一つの目的が蘭嶼調査のための強化合宿で
 あった事は、本調査の結果をよりよくする点に意義があり、実際に
 あつた事がある。成果はあつた。又、探検部員としての基礎的な素養を身
 につけねるという目的では予想以上の効果があった。このように
 、蘭嶼調査は二回の合宿によって、その訓練・準備を行つて来た。しか
 し、ここで考えるに、本来これらの訓練・準備は日常のクラブ活動にお
 いて為さるべき問題ではなかったのか？ 今回の強化合宿というものを一
 つの隊だけで独自にやってみる事は望ましくないと私は思う。

ともあれ、探検に対する基礎的な体力・技術・知識・結団力等々が我部
 の日常活動において、充分指導・勉強されていなかった事については、大
 いに反省すべき点であろう。

何分にも、大學生生活四年という短い期間の中で、探検部員として充分
 な基底的資格を持つてゐるようになるまでには個人の相当な努力と部の前向き
 の姿勢がなければならぬ事を、私自身今更のよう痛感している。

— 終 —

合宿参加者(学年は当時)

鈴木宏尚(3年)

遠藤紘一郎(3年)

津幡光哉(2年)

成田佳紀(1年)

〈座談会〉 大学祭を 省みて

—探検部の展示・スライドについて—

出席者	菅田 弦	文々	大下 好憲	商2
	遠藤 絃一郎	商3	新井 静男	文1
	大江 達彦	理3	大橋 正敏	商1
	合田 清寛	商3	藤山 正二郎	文1
	出羽 寛	理3	山本 暁二	商1
	安藤 肇	商2		
	井 邦明	文2	津幡 光哉	商2 (司会)

(学年は座談会当時)

一部長として— 部長として、十月までには、やりたい事の六割位しかできなかったが、大学祭は大成功であつたと思う。(遠ド)
 —大学祭責任者— 他の大学・他のクラスとくらべてみても、まあまあ
 の水準までいったと思う。(安ド)

司会 まず初めに、根本的な大学祭の問題・技術的な大学祭の問題・今年
 度と過去との大学祭を省みての今後の展望、この三つの案から話し合
 っていきたいと思います。出羽さんどうですか。

出羽 人から見てもらうという案ではすばらしかったし、実際に見た人も
 そう言っていた。

菅田 だんだんと探検というものが宣伝されていきつつある。自分として
 は都合により準備しているのを見られなかったもので、いままでよりさ
 びしかったが、朝、来てみると展示室が立派になっているのでおどろ
 いた。それにしても安ド君に感謝する。次に、前の話のとき問題とな
 った案、つまり学術と興味の案ですが、興味は十分出せ、学術も、ま
 あまあ出す。欲を言うなら、来年度学術をもう少し系統だてて出すのが
 いいのではないかな。

遠ド きれいに見える案に目標をおいたが——途中でくじけそうにた。安
 ド君がひらばって来てやり通す事ができた。

司会 一年生の諸君はどう思いますか。

新井 とてもすばらしいと思った。ただ学外の友から聞くと学術をもっと
 表面に出したほうがよいと言っていたが、僕はむしろ今年やったあの
 ようなもので良いと思います。

大橋 今年の大学祭では、展示の直前まで準備におわれていた感じで考え
 る余裕はなかった。

山本 他人から“良かった”と聞いて安心した。

大下 スライドが技術面で満足できない所があったように思う。

井埜 展示はまあまあだと思うが、スライドがちょっと弱かった。

谷田 長期的な展望(来年の台湾調査)を出したのはよかったと思う。展示の説明の練習をしておいた方が良かった。でも安ド君ごくろうさんでした。

大江 夏の調査の結果を大学祭までにまとめるのは無理だな。ここにも問題があると思う。説明の仕方・人員の配置などもう少し計画的だったら、とすばりしかったと思う。

安ド 何を探検部は訴えたいのかということのスローガンだけでごまかしたような感じがした。“探検とは何か”も訴えられなかった。人に探検部を認識させることにおいては失敗したと思う。また、大学祭に対する部の方針がはっきりしていなかったし、部員も顔ぶれ不足だった。人によく知らせようとする所に欠けるものがあった。当日になってスライド説明において支障をきたした。

この原因は何であるかということ、計画のまずさ、大学祭に対する安易な考え、粗雑な原稿・パンフレットなどがあるし、展示の最後の日になって探検部に悪い感情がでてきたし、初めに計画を立ててもその場その場で妥協してしまう。このようなことは改めるべきだと思う。

司公 今の安ド君の言葉は誰にも痛烈にひびいたことと思います。確かに安易な妥協的態度があった。形はできたけれど、内容がそぐわない。なれあいの気持は改めた方が良くと思う。

ここで、この問題を深くほり下げた方が実のあるものになると思いますが――

遠田 サークルに入っている事は、サークルをやらなければ生きていけないというような事ではないから、自分からやるというような積極的態度はうすれがらである。つまり部に対する責任感が忘れられやすい。しかし、このようなことではいけない、もっと自分を責任あるものになしてほしい。“探検部はオレがいなければやっていけないのだ”ということをつも考えていてほしいと思います。

出羽 スライド中で、神津島を発表しなか、たが、そのようなことは問題があると思うが――

司公 神津島の合宿のスライドはPRの点でも効果がないと思って削、た。

谷田 大学祭は成功したと思っても、よく考えてみると、探検部には悪い点がある。こんな点、安ド君など若いし是正してほしい。

司公 一年生の新しい感覚で、その悪い点について言ってもらいたいものだが――

新井 堅性的な面が探検部には見受けられる。

山本 部室がいつも汚い。

藤山 準備が遅すぎたし、展示の前日は徹夜してはならないと思います。疲れを前日まで残し、見る人に対しても失礼だ。それに原稿などは早く書いてしまっておくべきだ。

司会 それはどんな所に原因があると思いますか。

藤山 いい面かもしれないが、部員には主張しすぎる處、非協力的なものがあると思うし、時間を守らないからだと思います。

出羽 いろいろ悪い處がでてきたが、全体として良か、たということは確信できると思う。

菅田 最近になってわか、てきたことだが、“一人一人が主張しすぎる”ということは悪い面もあるが、良い面が多いと思う。探検部では、各人が探検観をもち、部の活動が自分に還元されるようになって、つまり一匹狼にな、て欲しいということだ。途中でいやになることのないようにしてほしい、専攻と探検とを別のものに考えていいから、同じ位重要なものだと考えてほしい。

遠藤 本当に、僕も、部員各人が探検観をもち、てほしいと思います。

司会 では次に技術的な問題を、また、その他、来年への展望についてのべてもらいたいのですが――

菅田 来年への展望を今やる必要はないと思う。というのは、大学祭はその年の探査なくしてはありえないからだ。

司会 それでは来年の探査計画、その祭への反映についてのべてくれませんか。

出羽 大学祭は学祭なるお祭ではない。それをやることによって、何か戻、てく、てくと思う。だから、探検についての講演などをしてもらうのもいいことだと思うが。

合田 五・六年ぐらいの長期間にわたり系統立てて探査地をさがすことが必要じゃないのかな。

遠藤 部長ということもあって、台湾・蘭嶼の方にあまり手がまわらず、説明も自信をもってできなかった。

菅田 フィリピンの方も、この後、続けるかどうか討論しても良いと思うけど――

司会 もう時間もないようですから、その問題は大きすぎるので次回にまわし、このへんで大学祭の反省会をおわりたいと思います。みなさんありがとうございました。(41年10月12日、102教室にて)

夏期探査計画 (42年度)

I. 宇治群島學術調査

鹿児島県・枕崎より西方海上100Kmにある無人島。

生物・地形調査と隊員の心理テストを行う

7月23日～8月24日

隊長 犬下・大橋・灰田・今井・加納・山口・東・秋篠・中島・川野

II. 宝島學術調査

鹿児島県・トカラ列島にある人口387人の島。

人文調査を行う

7月19日～8月18日

隊長 井笠・安藤・飯打・長谷川・小酒井・富宇賀・合田

III. 新冠川流域調査

日高山区から新冠町内を流れる川。

町内の開拓村落の社会調査と日高山区の生物調査。

8月1日～23日

隊長 出羽・小沢・新井・藤山・丸茂・水尾

■ 探査会—探検部運動史の検討 ■

—理四 峰 岸 常 之—

I. 緒言

探査会設立が昭和33年(1958年)であるから、10年に近づくが、その間、探査会学生部が発足し、それはまた、探検部のうちに発展的に解消していった。その性格の変化もまた今や検討の必要があると考えられるだろう。探検部なる名称はどうあれ、その実体はいかなる運動を行なっているのか、という客観的把握が本稿の目的である。

このことは、オーに、我々が討論することによつて行なわれねばならない。即ち、その歴史の検討はまた「探検精神」などのテーマの継続的問題に密着している。我々が、探査会以来、伝統なり聖地なりを語し合うことは多少なりとも、完全な実体、即ち歴史形における運動的形態をさぐる試みに他ならない。これはまた次の世代のための重要なカテゴリーであつたし、そうでなければならぬものである。寧ろ、我々の「現実の」活動はとりもなおさず、探検部建設における土台となることであることを忘却しては無意味であつて、この時局を通じて、恒性的精神を確立してゆかねばならないが、それと他人的な行動とは別問題である。部内統一問題においても「独断」をなくし民主的方向をさぐり出すことに日常の運動が展開されねばならない。

以上の語彙は、本稿の「検討」なる方法論において重要なオー段階を形成していることは先に述べたところである。

次に、我々はオニ段階に移行することであり、これは探検部の科学精神と一致するところであつて、つまり以後の探検(探査)活動において問題とするところは、この科学精神に基づくことない、観光旅行的遠征をいまいめなければならぬと云うことである。

すでにオー段階で要求された根本は、「未知への挑戦」なる概念のなかに抽象された数々の精神——冒険、冒険、勇気 etc. ——に依つてゐることであつて、この段階で一致することは恐らく普通なものであるに違いないし、この根本的欲求を喪失しては、人間の人間たる条件を放棄したと考へてよいと思ふ。

我々の問題とする所は、このオー段階の根本的欲求が、正しくオニ段階に発現され発展されているかにある。オニ段階——即ち科学精神は、オー段階——即ち未知への欲求による精神の発展であり転化であらねばならない。というのは、そうしたことは、「探検」を単なる「旅行会」の旅行とみなすことに対する提議を明確にすることに他ならないからである。

さて、このオニ段階に於ては、隊の行動がそのまま科学精神として現象し、そこには、隊員数の多少によらず、隊員は各専門分科内容に従つて協調の一員となることである。云うまでもなく、この理想的形態の確立のためにどれほどの日常活動や努力が費されたかについて、冷静なまでに客観化するために抽象しよう。

〔註〕本稿の方法に於ては、例えば、オニ段階に於ける他の意見があるには違いないが一各専門分科の制限を撤廃し、隊員が総分野にわたつて実践するべきだという意見など——そこにはまたもう一つの客観的検討が成される必要があるということに抽象した。

そうすれば、隊員の現地における活動は、それが部の日常活動の凝縮で

— 37 —

あるとしてよいのであるが、この客観化は非常にむずかしい。というのは、そこには、隊員の平均的主観覚悟に依ってその性格が左右されるという点で、本稿では、それらの拾得を行なうことによって、さらに下向し、現地に於ける隊の活動の対象化は、「計画書」及び「報告書」に対して妥当であることを認め、その科学性を検討する。

このようにして、「探査会—探検部運動史」の検討は、過去に行なわれた「学術調査」の「計画書」及び「報告書」の検討であることになる。

II. 資料の客観化

資料—学術調査「計画書」「報告書」—の客観化は、次の数量化を各項に行なうこととする。

- (A) 調査計画項目数の推移 (計画書)
- (B) 調査計画内容数の推移 ()
- (C) 報告結果項目数の推移 (一般報告書)
- (D) 報告結果内容数の推移 ()
- (E) 計画項目の報告された割合—(A)/(C)
- (F) 調査結果報告の学術レベルの推移

〔意義〕

(A)(B)は調査隊編成当時の組織程度であり、(E)はきちんと報告されたか、(C)(D)(F)は成功の程度である。

〔数量化〕

(A)(C)の項目数については、自然—人文—社会—医学の各系列に於いて次のような分類を行ない、各項目を一単位とする。

- (1). 自然科学系列—生物、化学(物理を含む)、地学(自然地理)
- (2). 人文科学系列—地理(人文地理)、民俗、厂史。
- (3). 社会科学系列—政治、経済(産業)、社会。
- (4). 医学系列——医学全般。

(B)(D)の内容数については、上記の(1)(2)(3)(4)によるパーセント表示。(E)は(C)/(A)によるパーセント表示。(F)は最も数量化が困難であるが、これについては得点制を採用する。

- (イ) 一般報告書はすべて一卓を与える。
- (ロ) 純学術報告書はすべて一卓を与える。
- (リ) 学生以外の学内及び学外有識者参加に対しては一卓を加算する。
- (二) 大学論叢・学生論集・研究公報告・卒論提出分につき、各一卓を加算する。

〔対象〕

「大探査」、「小探査」等「学術調査」内容をもつ資料に限定する。次のようにナンバー付けをした。

1958 (S. 33)	三宅島湖沼調査	No. 1
1959 (34)	知床半島学術調査	No. 2
1960 (35)	神津島調査	No. 3
1961 (36)	北上川水系調査	No. 4
同 上	那須湖沼調査	No. 5
1962 (37)	大雪山麓ヶ原調査	No. 6

1963 (S.38) 鵜渡根地内島調査 No. 7
 同 上 江川水系調査 No. 8
 1964 (S.39) オーク次男女群島調査 No. 9
 同 上 朝日連峰北部調査 No. 10
 同 上 小俣京丸集落調査 No. 11
 1965 (S.40) オーク次男女群島調査 No. 12
 同 上 北海道南拓農民調査 No. 13
 同 上 オーク次フィリピン・パラワン島調査 No. 14

〔補記〕上記の数量化に於いては、学内部外学生参加については、文連一自治会の構成サークルとして何ら区別しない（調査会時代も同様とする）。上記の対象に於いては、訓練その他のものは含めない。また、資料紛失のものがあつたので、これについては全項の数量化分析は行ないえないが、わかる所は記した（No.7, No.8）。なおNo.5は技術訓練の意味をもつものであるが、小調査として、これも含めたことを明記しておく。

Ⅲ. 資料の分析結果（データ）

データは、表及び図によつて次のようになつた。

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
項目数	3	3	4	4	3	5	3	2	3	3	6	3	4	3

（表A）調査計画項目数の推移

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
自然	100	100	33	33	100	33	50	100	50	50	33	50	33	33
人文	—	—	—	33	—	33	50	—	50	50	33	50	33	33
社会	—	—	33	—	—	33	—	—	—	—	33	—	33	33
医学	—	—	33	33	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

（表B）調査計画内容数の推移（%）

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
項目数	3	3	4	4	0	5	3	2	2	0	6	3	0	0

（表C）報告結果項目数の推移

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
自然	100	100	33	33	—	33	50	100	25	—	33	50	—	—
人文	—	—	—	33	—	33	50	—	50	—	33	50	—	—
社会	—	—	33	—	—	33	—	—	—	—	33	—	—	—
医学	—	—	33	33	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(表D) 報告結果内容数の推移(%)

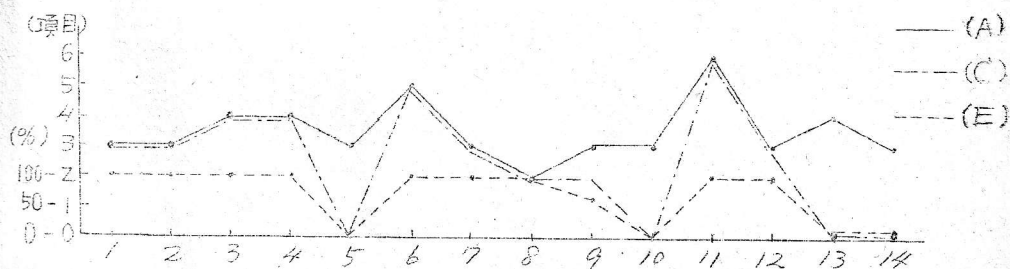
(註) No. 14の一般報告書は、計画書にあるパラワン島へ、写できず、ミンダナオ島リーガにおける調査結果が報告されているので計画は達成されていないとした。

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
割合	100	100	100	100	—	100	100	100	67	—	100	100	—	—

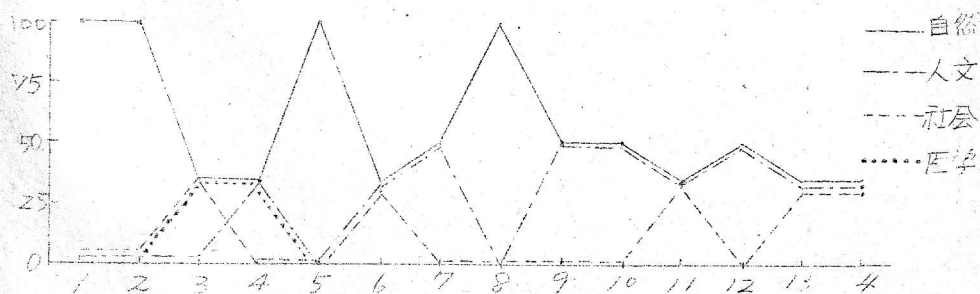
(表E) 計画項目の報告された割合(%)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
得点	4	4	3	3	0	1	1	1	1	0	1	1	1	0

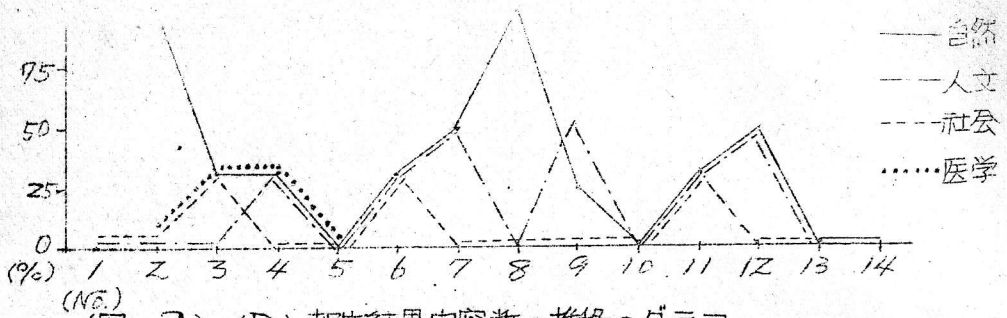
(表F) 調査結果報告の学術レベルの推移(点)



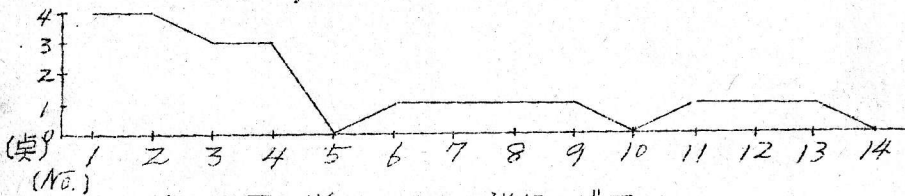
(図-1) (A)-(C)-(E) についての推移のグラフ



(図-2) (B) 調査計画内容数のグラフ



(図-3) (D) 報告結果内容数の推移のグラフ



(図-4) (F) 学術レベルの推移のグラフ

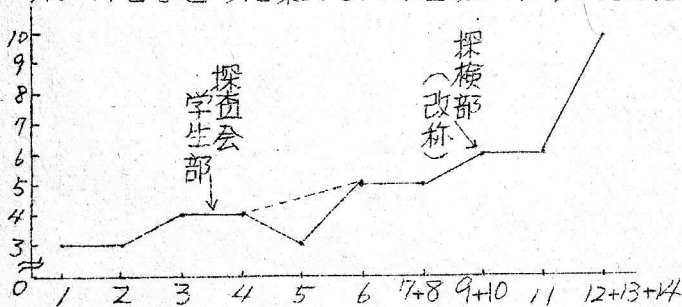
IV. 資料の分析結果に関する考察

先にⅢ. の「補記」に既述のように、No. 5は学術的な内容性が薄いのでこれについてのデータは厳密でない。

〔(図-1)の考察〕

(図-1)をみると、後にゆくほど計画項目の報告(達成)された割合が完璧(100%)ではない。この割合即ち(E)のグラフは大変緩い基準をしているのであって、例えば、少しでも一般報告書に記されて居れば報告されたとみなしているので、当然100%に行かねばならないはずのものであるから、この意味で探検部時代(No. 9~)は徹底した調査が達成されてないと云える。

次に(A)即ち計画項目数についてみると、このグラフでは大して年代によって変化してないが、これは同時期に行われ、総部員が2~3隊に分かれた調査を含むもので、よってNo. 7とNo. 8, No. 9とNo. 10, No. 12~No. 14をひとつに集計した項目数のグラフを次図-5に記す。



(図-5) 計画項目数の変化グラフ

これより計画項目は着実に伸びているが、この理由は2つある。

- (1) 部員数(委員数)の増大
- (2) 内容数(系列数)の増大

〔図-2) (図-3) の考察〕

上述の(2) 内容数の増大、を支持する根拠は、(図-2)に示すように、No. 1~8を通じて優位であった自然科学系列調査は、No. 9以後人文科学系列調査と一線になっている。即ち、探検部に改称されてから、自然科学と人文科学がほぼ同程度に調査されたと言うこと、社会科学系列調査も盛んになって来たということを示し、これは明らかに、部員に学部構成の推移の反映に他ならない。

この推移とともに、(図-3) 報告結果数も減少していることは先に述べたところであるが、内容からゆくと、自然科学系列調査の報告も減少して、人文-社会科学系列調査も一様でない。

〔図-4) の考察〕

上述の観測の強力な考察が(図-4)で成される。No. 1~No. 2では有識者参加のために学術報告レベルの高いのは当然であるが、学生主体となっている調査No. 3~No. 4では、この手続をよく継承し、やはり学術レベルは相当高い。No. 4からの探査会学生部によるものであるから、探査会学生部(No. 4~8)では、前期ではよく学術レベルを継承しているが、後期では、一般報告書だけの集数であって、探検部に改称(No. 9以後)してからも同様で、かえって調査不足とも云える。

以上のことからして、人文-社会科学系列の増大と、学術レベルの低下とはよく比例の関係が成立することがわかる。

次のように結論することが妥当と云える。

- (1) 自然科学系列調査は探査会前期ほど徹底して行なわれなくなった。
- (2) 人文-社会科学系列調査は調査結果が徹底して報告されていない。
- (3) (2)と関連して、人文-社会科学系列調査を「探検」に導入すべき方法論が見い出されていない。
- (4) 全般に、(図-5)に見られる項目数の増大は、(図-4)に見られるように実質を伴わず、この意味で、「充実」と云えるものではない。

V. 史的検討

Ⅳの考察から大変きびしい結論が導き出されたが、すでにⅢの結果に至る方法において、数々の捨象を行なったことを思い出して頂きたい。即ち、我々の検討においては、次に捨象された種々の問題に上向きなければならぬ。

Ⅱの資料の客観化に対してすでに(F)の「調査結果報告の学術レベル」の数量化が正しく学術「レベル」を反映しているかどうかは問題となることである。何よりも、この(F)項では、報告書の「質」をすべて外的な数量でしか表現していない。例えば、「一般報告書にはすべて一実を与える」としているが、このことは、オニ次男女群島調査では、生物班の相当な報告を行なっているが、こうしたことは無視している(オニ次男女群島調査隊報告「男女群島」S. 41. 1. 6, 「生物調査報告篇」参照)。

しかし、主意識について云えば、探査会前期においては伊東戸一氏(S. 37卒)が「O.B.の方々から見て我々学生部の部員に科学精神が大いにあるのではないかと思います」(横浜市大探査会々報 Vol. IV~No. 10)

と表現する時点から（氏は「科学する精神の欠如はO.B.の指導によって補ってゆきたいこと」と結論している）、先の生物調査報告の「序」に見られるような「この調査報告が――探検部の研究観を奮起させる一石となります」と表現される時点に（編者山崎君は部外者であることに注意）、変遷しているのである。

かくのごとき変遷の理由はⅣの考察によって次のように云える。

(1) 探査会前期の学術調査は自然科学系列、特に生物学的調査を主流として来たが、この「学術性」とは実質的に異なると云える人文・社会科学系列調査が主流となって来たこと。

(2) 同時にフィールドに、「調査」を主体とし、その中に「冒険」を見出すことが困難になって来た。

特に(2)の観念は、「探検精神とは何か」と云った論題が活発に討論されるようになった理由であり、人文・社会科学系列調査においてはⅣ.1/「小俣京丸集落調査」に見られるように科学精神の前提たる「冒険」精神が欠如し、探検部は一種の「調査部」のようなものになった。（S.41.10.1/「未知への挑戦」鈴木宏尚「自分のしたかった探検活動」参照）それは何よりも、「探検」なるイメージと統合していた「自然」なるイメージの欠如であった（「自然」と「社会」の概念的分離というドグマを考慮して）。

我々はこのようにして、新たなオー段階に再び上向して来た。そして、新たな第二段階の位相を通じて、人文・社会科学系列の探検方法論を早急に確立することが問題であることをみて来た。この探検方法論は、未知への欲求が正しく発現し科学精神となって現象するために、特に人文・社会科学系列調査はどのような研究活動を行なうべきかという基本的問題に集約される。

この過程において、探検部が「調査部」のような機関になるべきでないと言うことが、本稿によって結論されることである。まして何回かの海外探検を行なう所で問題は何ら解決したことになるない。

地味な研究の積み重ねによって資料をたくわえることであろう。

この研究のために、部の主流を再び「自然探検」一例えば、海底探検、洞窟探検、氷河探検、原野探検等に拡大強化することが我々の部にと、一度は通らなければならぬ過程であるに違いない。

〔補註1〕医学系列については何も記さなか、たが医学が重要でないと考えたことでなく資料不十分というより部員（会員）が前期のみで現在ほとんどないという理由によるもので残念であることを記しておく。

〔補註2〕探査会と探検部を分離して捉えたことを了承しておきたい。本来、探検部は探査会の継承である。

〔補註3〕1966年（S.41）に派遣されたオニ次フィリピンパラワン島調査及び安家川流域調査についての報告は検討中であるので発表してない。

Ⅵ. 終わりに

Ⅰで述べたように、本稿の目的は、客観的把握にしているが、充分な把握はなされていないと云える。また、掇象された全てを語りつくしたわけでもないが、このことは一つの新たな資料提出によ、て新たな活動の再生を期待する。即ち主体は現実にある。

方法の問題。探検なるイメージを冒険と調査（又は未知と科学）の2つ

に固定しない。これらは相互に軟化し相互作用の場にある。主体は改革におかれる(改革即現実)。

外部的つながり。部内と部外の2つに固定しない。部は外部と相互作用の場にある。ここで粗い近似を行な、た一平均的近似。

以上2つをつけ加えておきたい。

今後の部活動への問題提起

理 四 大 江 達 彦

横浜市立大学探検部も探査会が設立されて約十年になる。また部全体としての探検という考えがあやふやになり、そのため部活動すべての面において安易に考え、安易に行なわれる傾向が強く感じられるようになってきたので、この部報を発行するのと夏の合宿が近づいたのを機に我々部員は今の探査会(以後「会」と呼ぶ)探検部(以後部)の歴史を客観的につかみ、学びとれることは学びとして今後の部活動に役立てていかなければならない。そこで探査会報、部報その他からの資料を持ちより、今後の部活動はいかにあるべきかを私なりに考えてみることにする。

会ができたときの趣旨は、その会が生物教室を母体としていることから明らかのように「生物学をやっていく人達が野外の生活に親しみ、しかもこの人達の間に心の結びつきを作ろう」ということであつた。その目的としては「山」の科学的研究及びそれに伴う技術を身につけるということ、すなわち科学的に山という対象にとりくもうということであつた。そして学問的研究(特に生物)に重きがおかれ、それは学生論集その他でも明らかのように設立当初から二、三年は非常によく研究活動がやられてきたと思われる。またその内容に関してもうのように学生だけの部ではない強みもあつて高いレベルに立っていた。

しかしオー一回探査が三宅島の湖沼調査であつたように、会がかかげた「山の-----」ということばはもうそこで崩れてしまう結果となつた。それは山という対象のせまさからも無理なようであつたと思われるし、また会は山だけでなく広範な対象を総合的にとらえる会にならなければならぬという要求からであつた。このオー一回探査において会の性格は大きく決められ「山」という代りに「未開発又は未調査地域」と書きかえられた。

またオ二回の知床半島の調査において部の方向を大きく決めることが行なわれた。それは簡単にいうと「小さく深い」から「大きく浅い」という変化である。すなわち一つの島の一地点を選んでそれを学問的見地から深く見ていくということから、知床半島という対象を表面的に見ていくという変化である。この時点においてそれ以後の会及び部の性格形成がある程度なされたといつていいのではないかと思う。しかしその当時の会としての考えでは、その大きくなりつつある対象をどこまで広げ、それをどの方向に向け、そしてどう発展させていくかはオー一回、オ二回探査では足りなかったものが確立されずにすんだ。

このような中で我々の先輩たちは「探検とはなにか」を考え、そうして会の精神的支柱を作り上げるため努力したのですが会設立二年目にして会活動が停滞してきた。その原因の主要なものとして会が学生、教授、OBを柱になつてきたところにあつたと思われる。すなわちその構成人員内の意志の疏通のため多く集まることが要求されるが、時間の制限さ

れる教職員、OBと比較的時間の自由な学生との間には必然的に活動面でのひろさが出てきたと考えられる。そこで学生の積極的な活動を伸ばしていくために学生中心の活動を組む必要が求められた。そうして探検部の本来の意味での母体である探検会学生部ができた。そしてその始めの趣旨としては会と学生部とは独立して存在するのではなく、理想その他精神的な事を主にして会から学びつつ、学生の独自性をそこなうことなく活動することにおかれた。

その事と前後して会は天山探検計画を立てていたが、その計画の混乱で活動は停滞状態であった。そのような状態の中で学生自身によって神津島の調査が行われた。それ以後、会は事実上活動を今日まで行なっており、会の主体は学生部に移行したのである。神津島の探検は学生主体のもので、それまでの様に学問的に多くを望むことができなかったが、学生としてできる範囲内において各自の研究テーマに関する調査をすることにし、そのことを以後の活動への基本線として活動していこうとした。このように会が混乱したのは前述の他にいろいろ理由があるがこれは後で述べる。

その後学生部は北上川、大雪山、江川とやり、その後探検部と変名し、男女群島、朝日連峰、北海道南拓部落、パラワン島、台湾とやってきたわけであるが、まず学生部が探検部に変った事はただ名が変り、その時点で存在があらわされていた会から形式的に独立するだけのことで、問題の本質的なことではない。

それより、この一連の活動を通して見られる同じようななりゆきについてが問題である。それらの活動は規模の大小、口内、口外、目的の違いなどはあるが、学生だけの探検として席につきまとう学問的に粗野なこと（一部には例外がある）、候補地が先に決まりそれに「～調査」という名を付けること、それから部になってからはある一部の者が行きたいと思うとそれに数名の同意者をえて、部全体でその活動を推し進めるのではなく、その隊の者だけによって行なわれること、これらの傾向はここ二、三年前から極端に大きくなり、最近では部内にこれから起因する数々の問題が発生してきているのは事実である。

以上が簡単な部設立からの歴史である。表面的に流れてしまてその思想的問題まで入れなかったのは著者の不勉強のせいであろう。

それでは一、二の重要と思われる時々の事についてもう少し詳しく書くことにする。まず第一に学生部ができた時の部の停滞、第二に枚々が新しく記憶している部になってからの活動における問題点について。

第一のことについては、この時々において以後の部の性格が一応確立されたといっている。當時を考えることによつて今後の部の基本方針を決めていくのはごくあたりまえの論理である。それは、もう知床へ行く前から会に内在していた問題で、そこへもってきてジャーナリズムに議がれ会員が浮き浮きしていた。その内で天山計画が持ち上がった。これは会員がもう少し会の内容と時の口際情勢を謙虚に見ることができていたら防げたものであろうと思う。それから知床へ行く前から内在していた問題とは会員が私利に走りすぎたということです。もちろん会員の利益を念頭におかない会などは存在するものではありませんが、程度の問題であると思います。やはり部の力を過信していたのではないのでしょうか。この時の状態を考えるに今の部の状態と非常に似ているように思われるのですが、それは全体的な探検ブームのせいでもあるでしょう。

だが否定的な面ばかりではなく、今まで部が隊を出したのに比べ、その計画性において格段の差があり、二ついうところは見習うべきではなからうか。また他に隊の出し方において、前にふれたように今の部では明らかに間違っているのであって、それらはこの天山の計画をもっと検討して変

えていく必要があるのではないか。又、調査項目が生物主体にしばられており、専門の先生もついておられたのは強みであったと思われる。それにこの計画は数年にわたる長期的なものであり、これも見習う必要があると思われる。

サニの案では一番大きな問題は何度も言っているように、一つの隊を出すのに部全体の協力なしに行なわれた事、これはその地へ行きたい者が集まって行くのであって、部の要求することを調べるために要求する人物が行けない状態におちいりやすい。そして部になてから、求める人物が必要なほど隊の性格、その探検の意義について話が進展したことはないが。ただ今年の状態を見ればわかるように夏が来たので行くという様なことが今まで続いてきた。このあたりで一段上へ上げるように務めなくてはならない。それには部の方向を決めるような長期(数年)の計画(これはただ東南アジアをやるというものではない)を立て、その線にそって必要な広い意味での訓練をやっく行く必要があるのではないか。しかもその長期の計画には調査ということが付いて回ると思われるが、それは皆々学生の方量をよく見てそれはある程度向上するが限度は見えていないその力量でやる事ができ、一つのまとまったものが得られるということが理想である。

今までの調査隊を顧みると私自身が見ても調査と名付けろにははづかし、もちろん専門家が来れば問題にされないような物が多かった。もちろん人によって「調査」という語にはいろいろな意味があると思われるので一概にはいえないが、少くとも調査というからには一年以上の文献調べを行ない(もちろん時間だけの問題ではない)数回の奥地練習を通して行なわれるものと私は思う。学生の内ではそれは不可能という人もいるかもしれないが、それは個人だけを見ている人であって、ある目的をもった団体が突き進む力を知らない者の考えである。必ずできると思う。今まではこれが調査だという固定観念がさき上っていて、それで自己満足していたのではないだろうか。これでは部の発展などありえない。

なにか問題提起のようになってしまったが、今年の夏の台宿を機会に、部全体でこの問題を話しあったらよいと考えるがいかがであろうか。
(了)

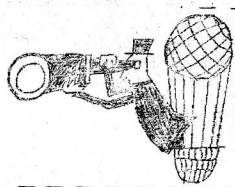
白瀨中尉

鈴不宏固

[illegible]

生じたのであった。明治44年11月シドニー港を出発し、見
 事の上陸し、南緯80.5°の位置にまで到着する。そこでめいて、食料は、
 の眼に入るかぎり、その水以上、前進することには不可能となつた。白瀬中尉は知
 るわけにもないが、14月前にアムンゼンが、1日前にスウェットがそれより
 極地に達して下つたのである。スウェットやアムンゼンの船が「開南丸」の
 る〜4倍なものと見ると、そして探検について関心のない日本人のことと看
 るれば、素直な烈意なものであった。そのころ、よくやった
 のである。

書評



「生と死の妙葉」

レーチェル・カーソン著

松橋隆司

「みみずの代用食」と代した一口話が「週刊文春」5月1日号にのつて
 いた。それは次のような話であった。

——ワシントン国立動物園長リード博士が頭を悩ませている大問題が
 ある。ミミズの不足、そのためミミズを常食としている動物が栄養失
 調にかかっていることだ。

そこで早速運営委員会。その席上である委員がいった。「スパゲッ
 ティを5センチに切りみみずと同じ味をつければ、動物たちに見わけ
 がつくまい」——拍掌。

この案はただちに採用されたが、はて、と園長先生は思案なげ首。
 なぜなら、本物のミミズの味を知っているものなど一人もみらんから
 だ。

そして、この記事を書いた人は「猫の首に鈴をつけるのは誰か」とい
 う話である。と結んで、話しは笑いのうちに終わってしまった。

だがこの書の著者レーチェル・カーソンの話は、笑いが終ったその空虚
 な空気のなかからはじまるのだ。「土壌の沢山の生物がうごめいているが
 なかでも大切なのは、みみずだろう」と著者は話し始める。「デューブル
 ダーウィンの計算によれば、みみずのかで地表につもる土の量は、10年に
 1インチから1インチ半ぐらいのあつそになるという」(著者はダーウィ
 ンの「みみずの活動による栽培土壌の形成」ならびにみみずの習性の観察
 をあげている)。そうして穴ぐらは、土壌を風化し、水はけをよくし、植
 物の根がよく通るようにする。みみずがいればこそ土壌バクテリアの活性
 作用はまし、土壌の腐敗をくいとめるのだ。みみずの消化器系を通るうち
 に有機物は排泄物によって土壌は豊かになっていく。みみずばかりでな
 く、「信じられないくらい沢山のいろんな生物が棲みついている。もしも
 そうでなければ、土は不毛となり死にはまってしまう。無数の生物がうごめ
 いていればこそ、大地はいつも緑の衣でおあわれんでいる。」

このように土壌の世界は、さまざまな生物がおりなす糸によって、それ
 がたがいにもちつとたもたつている。さまざまな生物の微妙なバラン
 スのバウンスがあればこそ自然の偉大なあゆみということがあらう」と

著者は、ハチ、DDTの殺虫や除草のための使用でこれまでに
いる。そして、お驚くべきことに、土壌の中に入った殺虫剤は、1ヶ月や
2ヶ月で消えさる。何年も何年もの間、土壌の中に残っている。アメリカの
コロンビア大学で、タバコの煙草をしらべると、砒素が検出され、その含有量は、
1932年〜1942年のあいだに3倍以上も増えている」といふ。
もはやミズカスパゲッティを代用せねばならなかった理由を説
明する必要はないであろう。人間は自分自身の作りだしたもので、自分の
生命を救うか、殺すか、という選択をしなければならない。ノーベル賞受賞者H・J・マラーが、自然に
「不用意に、また無差別に、おこなわれている化学的・大量戦争の自然に對し
てもたらす惨害、人間を陥れる惨状を、痛烈に告発」することを誰れかか
やらねばならなかった。ルソーが「自然に歸れ」と叫んだときから、す
でに予見されてきた資本主義的な無節制の物質文明あるいは機械文明の
間隙の問題と深く関連して、体制のゆがみ、あるいは悪の告発として、
この「起訴状」は、現代的・史的な意味をもっている。けれどこの著者
レオ・チエル・カーソンはその意味を私のように理解していないようであ
る。せいぜい、ジュリアン・ハックスレーのように「現在のひと時とはる
かなる前途、自前の部分的な利益と人類の永続的利益のあいだのはげしい
対立を鮮やかに照しだせ」とつづき、思っているぐらいであらう。
科学者によってなされたことは、互にかい否の警告がアメリカの女性
作家クラブの先輩である寺島和光さんは、自他ともに許す熱烈なナチュ
ラリストで、自然保護についての造詣も深く、探査会の会報にもすぐれた
記事を書いておられるので、関心を持っている人は、お話を聞かれたら
かう思う。
今さら、この問題について、私の出る幕くはないが、この書物などの
ような意味とか意義をもっているのかを不十分ながら明らかにしてきたよ
うに、皆さんお探検について、その活動に、いま満足している
いつか、史的・倫理的な満足感に、いま満足しているものである。
1964年の6月に日本では「新潮社」から新装版が出ているが「生と死
の妙薬」は、40年のタイトルを原題は「Silent spring」。1961年に
一部をニューヨーク誌に掲載。62年ホートン・ミフリン社から出版され
ているということだから、書評としてはずいぶん時代遅れであるが、同時に
にこれほど新しい書物は珍しいのである。特に日本においては「古くも新
しい」に違いない。採検部ではどうだろう。

—— 新潮社版 430円

部 史

- 昭和 33年 2月 探査会発足 (会長 福井玉夫教授)
 8月 三宅島 (新鵜・大路) 調査 (団長 福島博 他22名)
- 34年 7月 知床半島学術調査 (団長 福島博 他34名)
- 35年 1月 八方尾根雪上訓練
 7月 神津島調査隊 (隊長 伊東芳一 他7名)
 11月 探査会学生部発足 (部長 横山室雄)
- 36年 2月 興日光雪上訓練
 5月 西丹沢山岳訓練
 7月 北上川水系調査 (隊長 伊東芳一 他12名)
 10月 那須鏡沼調査
- 37年 4月 (部長 松橋隆司)
 5月 尾瀬雪上訓練
 7月 大雪山扇ヶ原調査 (隊長 寺島和光 他16名)
 11月 部長 河合武臣
- 38年 3月 苗場雪上訓練
 4月 (部長 山口由則) 松橋隆司に途中で交替
 5月 北八ヶ岳山岳訓練
 7月 鯉波根・地内島調査 (隊長 木村努 他11名)
 江水水系調査 (隊長 河合武臣 他7人)
- 39年 3月 興日光雪上訓練
 4月 探査会学生部改め探険部となる (部長 松本芳樹)
 5月 多良川ボート下り
 7月 オ一次男女群島調査 (隊長 松本芳樹 他11名)
 朝日連峰北部調査 (隊長 興田耕造 他10名)
 10月 小俣京丸集落調査 (隊長 菅田弦 他7名)
- 40年 3月 吾妻雪上訓練
 4月 (部長 菅田弦)
 5月 南アルプス山岳訓練
 8月 フリピン・パラワン調査 (隊長 菅田弦 他4名)
 オ二次男女群島調査 (隊長 遠藤紘一郎 他8名)
 北海道雄武集落調査 (隊長 山口由則 他4名)
 10月 丹沢山岳訓練
- 41年 4月 (部長 遠藤紘一郎)
 5月 興多良山岳訓練
 8月 フリピンパラワン島オ二次調査 (隊長 合田清雄 他4名)
 台湾蘭嶼島調査準備 (隊長 遠藤紘一郎)
 (神津島合宿)
 (隊員台湾偵察)
 安家川と洞窟調査 (隊長 名和裕美 他7名)

昭和41年 9月
11月

パラワン隊帰国
(部長 合田 浩)
役員改正

42年 2月
4月

蘭嶼調査 (隊長 遠藤 絃一郎 他3名)
(部長 井野 邦明)

41~42年度活動報告

41年度(1966) 4月 前期総会(部長 遠藤 絃一郎)

4月 23日 新入生歓迎コンパ 逗子海岸において

29 新入生歓迎合宿 雲取山

5月 2日 リーダー 安藤 他 菅田・遠藤・大江・
合田・名和・井野・天下・新井・隠岐・
大橋・関根・藤本・藤山・丸井・山本

14日 パラワンシンポジウム

15日 部会にて夏期探査をパラワン・台湾・
安家の3地域において行うことに決定

21日 スライド映画会(一次パラワン・オノ男
女)

6月 6日 台湾準備会をひらき正式に遠藤他5人の
隊員を定める

10日 安家リ調査の隊員、名和他8人に決定

11日 名和、東北安家へ偵察
和見集落調査を7月6日~7日に行うこ
とに決定

20日 (夏期探査準備のため実行できず)
名和、帰国し偵察報告

25日 探査会・探検部合同研究会
(パラワン島調査について)

7月上旬 パラワン最終準備

18日 パラワン隊壮行会

21日 パラワン隊、横浜港よりスリピンへ出発
(隊長 合田、他 鈴木(他)・出羽・安藤・井野)

31日 台湾蘭嶼偵察隊出発 東京駅より
(天下・山本)

8月 2日 安家隊、上野より岩手へ出発

(隊長 名和、他 大江・山本・峰岸・新井・
大橋・藤本・藤山)

14日 安家隊帰国

24日 蘭嶼島調査隊、神津島へ合宿に出発
(遠藤・鈴木(他)・津幡・成田)

26日 蘭嶼偵察隊帰国

9月 1日 神津島合宿終了

12日 パラワン隊帰国

10月 10日 パラワン隊報告会

10月 22日 御取山塊において山岳訓練
 (リーダー 大下、他 遠藤・合田・安藤・井埜・津幡・大橋・藤本・藤山)
 23日 橋・藤本・藤山)
 25日 奥多良・青岩鍾乳洞調査
 (新井・大橋・藤山)
 26日
 30日 大学祭 (スリピン・パラワン島, 東北・安家川の紹介)
 11月 6日
 14日 後期総会, 大学祭反省会, 大学祭コンパ
 (部長 合田寿)
 26日 小金沢連客に於いて山岳訓練
 (リーダー 合田, 他 遠藤・大江・出羽・安藤・井埜・大下・津幡・新井・大橋・藤本・藤山)
 27日
 12月 3日 丹沢山岳訓練
 (鈴木盛・峰岸・成田)
 4日
 10日 忘年コンパ
 14日 新年コンパ
 2月 11日 台湾蘭嶼調査説明会
 21日 蘭嶼隊、壮行会, 退社レコンパ
 28日 蘭嶼隊、東京駅より出発
 (隊長 遠藤, 他 鈴木盛・津幡・成田)
 3月 18日 乗鞍雪上合宿
 (リーダー 合田, 他 松橋・折井・安藤・井埜・新井・大橋・藤本・藤山)

42年度 (1967)

4月 12日 蘭嶼隊帰浜
 24日 (部長 井埜邦明), 新入部員 15人
 28日 新入生歓迎コンパ
 5月 5日 西丹沢新入生歓迎合宿
 (リーダー 井埜, 他 大江・折井・小林・合田・名和・峰岸・大下・小沢・津幡・新井・大橋・藤本・山本・藤山・成田・秋鹿・東・今井・加納・川野・紙村・小油井・長谷川・室田・富宇賀・中島・水尾・山口)
 6月 16日 青岩鍾乳洞窟訓練
 (リーダー 藤山・安藤・新井・大橋・成田・秋鹿・東・今井・富宇賀・丸茂・山口)

昭和四十一年度

部員名簿

遠藤 紘一郎	神奈川県平塚市平塚1687 TEL 21-3732 商学部経営科4年(4047) 神奈川県立平塚江南高校
大江 達彦	横浜市中区金沢区六浦町3042-35 大阪府東住吉区西今川町4-45 TEL 702-9324 文理学部生物科4年(4802) 大阪府立今宮高校
折井 亮夫	横浜市中区金沢区六浦町1523-11 田中光太郎方 長野県松本市理橋2-4-12 TEL 3-2505 文理学部生物科4年(4816) 長野県立飯田高校
小林 恵二	横浜市金沢区六浦町1825 高橋荘内 富山県下新川郡入善町小摺戸4969 文理学部地理科4年(4566) 富山県立入善高校
合田 清	川崎市中原区中平町3-26 737号 TEL 51-8024 岡山県瀬戸市301-2 TEL 72-0377 商学部経営科4年(4104) 広島校
鈴木 光	横浜市金沢区青園町2338 守川方 愛知県蒲郡市相原町小山21 TEL 8-3665 文理学部生物科4年(4808) 愛知県立豊橋東高校
鈴木 宏尚	横浜市金沢区六浦町1825 高橋荘内 TEL 70-6885 静岡県浜松市高町137-2 TEL 54-4830 文理学部社会科4年(4589) 静岡県立浜松北高校
出羽 寛	横浜市中区金沢区六浦町3042-35 北海道旭川市一条14丁目右1号 文理学部生物科4年(4809) 北海道旭川東高校
名和 裕美	東京都文京区小日向台町3-11-1 TEL 947-2800 文理学部化学科4年(4859) 都立神代高校
峰岸 常之	東京都大田区東糎谷6-9-21 文理学部化学科4年(4803) 都立小山台高校
守藤 嵩	東京都杉並区下高井戸2-552 TEL 328-0398 文理学部独文科3年(5020) 都立豊多摩高校

井笠 邦明	横浜市保土ヶ谷町仏間町 1324 TEL 33-8025 (04) 水野元 文理学部社会科学3年(5521) 都立江北高校
大下 好憲	東京都大田区北馬込1丁目17番 6-303 TEL 771-3903 徳島市南二軒屋町西開 1307-10 TEL 3-1774 商学部経営3年(5064) 徳島県立城南高校
小沢 幸重	東京都中央区北6丁目23-12 田中芳 TEL 762-8679 茨城県船橋郡阿見町大学阿見 3739-13 文理学部生物科3年(5807) 茨城県立水戸第一高校
津幡 光哉	神奈川県中郡伊勢原町栗大竹 457 TEL 95-0370 商学部経営科3年(5225) 神奈川県立平塚江南高校
新井 稔男	川崎市藤崎町 2-150 TEL 22-5455 文理学部地理科2年(6513) 神奈川県立川崎高校
大橋 正敏	横浜市鶴見区鶴見町 663 TEL 52-7216 商学部2年(6064) 神奈川県 浅野学園
成田 佳紀	東京都中野区警一宮 5-7-13 TEL 990-6537 文理学部生物科2年(6814) 都立武蔵小金井高校
藤本 隆久	東京都江東区龜戸 5-9 TEL 681-6655 商学部2年(6302) 都立両国高校
藤山正二郎	横浜市金沢区大瀬町 167Z 広志方 佐賀県佐賀市柳町 5 文理学部社会科学2年(6648) 佐賀県立佐賀西高校
山本 皖司	東京都世田谷区代沢 5-23-8 長野県西筑市郡上松町セギ TEL 379 商学部2年(6386) 長野県立松本深志高校
秋鹿 豊	横浜市金沢区大瀬町 3938 大内方 島根県松江市朝日町 487 商学部1年(7001) 島根県立松江南高校
東 邦典	東京都世田谷区代沢 2-36-29 若葉荘内 広島県広島市牛田町畑区 984 商学部1年(7015) 広島県立広島国泰寺高校
今井 保弘	横浜市南区大久保町 546 愛知県豊橋市岩屋町岩屋 1-2 商学部1年(7046) 愛知県立豊橋東高校

加部 良幸	東京都目黒区中根2丁目12-16 TEL 718-6891 文理学部文科1年 都立玉川高校
川野由美子	横浜市神奈川区三ツ沢南町41 TEL 31-3780 文理学部文科1年 神奈川県立横浜翠嵐高校
紙村 徹	逗子市桜木8-2-45 越中谷方 大阪府高槻市春川町1-8-8 商学部1年 大阪府立茨木高校
小酒井由美	神奈川県藤沢市長後838 商学部1年 神奈川県立湘南高校
宝田 俊幸	東京都中野区中野2-24-226 文理学部文科1年 都立豊多摩高校
富宇賀ひさ子	横浜市金沢区平沼町40 堀川方 群馬県新田郡尾島町柏川522 文理学部文科1年 群馬県立太田女子高校
中島美知代	横浜市保土ヶ谷区川島町2906 TEL 38-1675 文理学部文科1年 神奈川県立横浜平沼高校
長谷川 上	横浜市中港北区篠原町2115 TEL 40-4598 商学部1年 栄光学園高校
丸茂 一文	横浜市金沢区平沼町132 栗岡方 山梨県北巨摩郡大泉村谷戸4123 TEL (大泉)8741 文理学部生物科1年 山梨県立甲府一高校
水尾 寛己	横浜賀市田浦町3-61 新倉文方 北海道川上郡美瑛町下宇莫別 文理学部生物科1年 道立加川東高校
山口 幸雄	横浜市南区三春台126 高井重徳方 愛知県栗原郡木曽川町黒田東針口41 TEL (6)3245 商学部1年 愛知県立旭丘高校

丸山 晃	東京都新宿区東大久保2-309 新宿第二コーポ511 東京大学理学部応用 生物研究所
花野井忠司	日大三島高校
一戸 正憲	川崎水道局
蒔田徳太郎	日本窒素中央研究所
大野 迪郎	長野県北安曇郡白馬村 白川小屋
奥田 耕造	東京都太田区久ヶ原1070 醍醐隆一 40年度商卒 TEL (152)4030 報国マエーン
皇村 健二	千葉県市原市 油井戸 2297 40年度理卒 湿津中学教員
篠原 道雄	香川県高松市天神前1-9-13 40年度商卒 百十四銀行
田村 瑞穂	沼津市香貫町八重104 40年度理卒 市大医学部技術吏員
中田洋一郎	横浜市保土ヶ谷区南希望ヶ丘6 TEL (92)4148 40年度理卒 栗田工業
山口 由則	福岡県直方市大字下境宮洞 県職員 鷹取寮 40年度商卒 福岡県庁
松本 芳樹	香川県綾歌郡綾南町陶猿王 TEL (702)0961 40年度商卒 香川相互銀行
三橋 孝子	東京都世田ヶ谷区玉川尾 40年度理卒 東京都水道局

森谷 孝生	東京都北多摩郡泊江町寛東565 40年度理卒 早大大学院
若藤 惇	横浜市保土ヶ谷区帷子町2-85 Tel (43) 0794 医学部4年
要 宏輝	大阪府布施市近江堂413久保田方 Tel 布施 (21) 1188 41年度商卒 代議士秘書
菅田 弦	東京都日野市多摩平団地81-301 41年度文卒 中学教員
高松 康夫	川崎市丸子通2-707 41年度文卒 Tel (22) 6068

関係団体住所録

京都大学探検部

大阪市大 "

大阪府大 "

大阪大学 "

立命館大学 "

同志社大学 "

関西大学 "

関西学院大学 "

松山商大 "

愛媛大学 "

福岡電大 "

九州大学 "

北海道大学 "

東京農大 "

早稲田大学 "

上智大学 "

学習院大学 "

拓殖大学 "

東京大学 "

明治大学 "

亜細亜大学 "

東海大学 "

跡見女大 "

横浜国立大 "

京都市左京区吉田本町

大阪市住吉区杉本町459

大阪府堺市百舌鳥楠町4-804

大阪市北区常盤町36

京都市上京区中野町

" 上京区今出川通烏丸

大阪府吹田市千里山17

西宮市上ヶ原一番町

松山市清水町2-128

松山市持田町

福岡市下和田字生水

福岡市箱崎町

札幌市北八条西5丁目北大学生部会打

世田谷区梅丘1-1-1

新宿区戸塚町1-647

千代田区紀尾井町7番

豊島区目白1丁目5-1

文京区小日向町3-4-14

目黒区駒場所教養学部

港区芝目金今里町42 Tel (443) 8231 内線270

武蔵野市境5-14-29

渋谷区宮ヶ谷2-28-4

文京区大塚町56

横浜市南区清水4丘

学術探検会

学探検部

学探検部

学探検部

学探検部

学探検部

学探検部

学探検部

学探検部

学探検部

学探検部

学探検部

学探検部

学探検部

学探検部

編集後記

探査会時代に発行されていた会報が14号においてとどえて以来4年間、部の機関誌は全く発行されなかった。その間にも、各隊の計画書、報告書は多数発行されていたがそれだけではまだ言いつくせないものがあった。発行再開の動きは昨年の「未知への挑戦」の発行に始まる。それは文藝的な性格が強かったが、部報発行への大きな刺激となったことは間違いない。

昨年の、それから編集を開始し、やっと完成にこぎつけたわけであるが、内容に問題が残っている。経済的なことでガリ刷り発行したため機械的なものに力をとられること。編集者自身としても技術が未熟であること。一報報告書を併載しているのかということ。部としての発行体勢が不完全であることなど……

しかし、部 転換期にさし、部の方向を摸索しようとする動きを走らした文がのせられていることは部報に性格をもたせてくれて、いささか、泥縄式に編集したものとして一つの救いでもある。

不完全な部報ではあるが少しでも部の発展に貢献すれば幸いである。

部報	15号
	1967年7月24日発行
編集者	津幡光哉 藤山正二郎 川野由美子 山口幸雄
発行所	横浜国立大学 探検部 横浜市金沢区六浦町4646 TEL(70)8151